



TITLE:

『オルジェイトウ史』が語るアジ  
キ大王の系譜 --外交使節の往來と  
歴史書の編纂(1)--

AUTHOR(S):

宮, 紀子

---

CITATION:

宮, 紀子. 『オルジェイトウ史』が語るアジキ大王の系譜 --外交使節の  
往來と歴史書の編纂(1)--. 東方學報 2019, 94: 460-437

ISSUE DATE:

2019-12-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/250688>

RIGHT:

# 『オルジェイトウ史』が語るアジキ大王の系譜

—— 外交使節の往來と歴史書の編纂 (1) ——

## 宮 紀 子

1. はじめに
2. 『オルジェイトウ史』 A. H. 712 條

### 1. は じ め に

biryigirminč ay 十一月 < sākišinč ay 八月十九日 (1304 年 9 月 19 日) に相當する (704A. H) 2 月 17 日 (1304 年 9 月 19 日) の土曜日, Timūr-Qān <sup>テムル カアン</sup> 鐵穆耳皇帝 (=成宗) および šah-zādah Qāidū <sup>カイドウ</sup> 海都王 / 太子の息子の察八兒 <sup>チャバル</sup> の使臣たちの到着があった。皇帝 <sup>カアン</sup> の使臣 <sup>エルチ</sup> たちの名は ① Suldūs < Suldūs <sup>スルドゥス</sup> 孫都思 (遜篤思) の Tamāgi < Temeči <sup>テムチ</sup> 鐵邁赤 (帖麥赤) / Tammači <sup>タマチ</sup> 探馬赤 ② Ğalāir < jalayir <sup>ジャライル</sup> 札刺兒族の Tūrčiyān <sup>トル チヤン</sup> 脫兒赤顏 (脫里察安 / 脫里赤安 / 朶兒赤延) ③ Ğāfar h̄wāgah <sup>ジャバル ホージャ</sup> 札八兒火者<sup>1)</sup> の後裔の Mustafī h̄wāgah <sup>ムスタフィーホージャ</sup> 木思答伯火者<sup>2)</sup>。察八兒 <sup>チャバル</sup> の使臣 <sup>エルチ</sup> たちの名は, ① 札刺兒 <sup>ジャライル</sup> 一門の Īsin-Timūr < Āsān/Esen-Temūr <sup>エセンテムル</sup> 也先帖木兒 ② Ğāfar <sup>ジャバル</sup> 札八兒という小名のもの? <sup>3)</sup> ③ Qāvġatāi < Qavġatai 千戸<sup>[補1]</sup> に屬する Ūrus bahādūr <sup>オロス</sup> 斡羅思 (斡魯思) 拔都兒 <sup>バアトル</sup>。Dūā/Duvā <sup>ドゥア</sup> 土哇 (都阿 / 都哇 / 都瓦 / 篤哇 / 朶瓦)<sup>4)</sup> の使臣 <sup>エルチ</sup> たちの名は, ① mānglai < Mon.manglai <sup>マンライ</sup> 頭哨 / 莽來 (フレグ・ウルスの領域の最前線アフガニスタン方面)<sup>5)</sup> の Sārbān <sup>サルバン</sup> 撒兒蠻 ② Abūkān < Ebügen <sup>エブゲン</sup> 也不干 (額不干) の息子の Timūr <sup>テムル</sup> 帖木兒 ③ Aġiqī <sup>アジキ</sup> 阿只吉 (阿赤吉 / 阿直吉) の息子の Ānandah <sup>アーナンダ</sup> 阿難答。友好・友愛の講和・得策・道筋のために。

状況の眞實・口上の概要は以下のごとくである。

<sup>カイドウ</sup> 海都は, hū-yil <sup>カイドウ</sup> 長年 < tawšqan yil <sup>ガザン</sup> 卯年, 太陰曆 702 年の 7 月 (1303 年 2 月 19 日~3 月 20 日), 公正なる Ğāzān <sup>ガザン</sup> 合贊の čaq <sup>チャク</sup> 時分に, 鐵穆耳皇帝 <sup>テムル カアン</sup> の čerig <sup>チェリク</sup> 軍 との戦いより歸還し, 病氣の兆候にさらされた。そこで侍醫たる臣僚の Haidar <sup>ハイドラル</sup> 海答兒はかれに下劑 25 粒を與

『オルジェイトゥ史』が語るアジキ大王の系譜

えた。腹痛をとまなう下血のうちに、Qarā-Qūrūm<sup>カラコルム</sup>合刺和木の疆域（へ一日行程の）Qalan-bašの宿頓にて逝去した。

…[中略]…

閑話休題、算端<sup>スルタン</sup>（鎖潭＝オルジェイトゥ）は皇帝<sup>カン</sup>の使臣<sup>エルチ</sup>たちを慰撫し、出立の許可を與えた…。

yilan-yil<sup>巳</sup>の年 <luu yil<sup>辰</sup>年 biryigirminč ay 十一月十日（1304年12月7日）に相當する5月10日の水曜日（1304年12月9日）、Ulūs-i Ğūġi <joči<sup>ジョチ</sup> 朮赤の ulus<sup>ウルス</sup> 國 Qipčāq-bāš<sup>キプチャク</sup> 欽察帽の諸城鎮の pādšāh 君主（＝汗）Tūqtuā <Toqto'a<sup>トクトア</sup> 脱脱 / Tūqtā <Toγda<sup>トクタ</sup> 脱脱の根前より使臣<sup>エルチ</sup>たち —— かれらの先導は Nūhudāi <Mon.Noqtai/Nu'udai という名の臣僚（＝官人<sup>イヤン</sup>） —— の到着があった。成就すべき講和・得策・一致の道のために<sup>6)</sup>。

これは、フレグ・ウルス（＝イル・カン國）の正史ともいべきラシードウッディーンラシードウッディーンの『集史』第一部「ガザンの吉祥なる歴史」の續編のひとつに数えられ、『集史』第二部の編纂にも大きく寄與したとされるアブー・アルカースィム・カーシャーニーの『オルジェイトゥ史』の一節である。中略部分には、カイドウの死後、チャガタイ家の當主ドゥアがオゴデイ家の解体・中央アジアでの覇權のために動き出すさま、成宗テムルの死、ブルガン<sup>カトン</sup>皇后が安西王アーナンダヤアrik・ブケ家のメリク・テムルと共謀してカン位を奪取した政變等が、數葉に互って記述されている。起居注・日録の類に依據した編年體の形式をとりながら（カンの季節移動と朝廷内の重要人物の死亡記事を中心に採録）、あいだに各ウルスのさまざまな逸話が挿入されるのである。

① 記事の重複、話題が前後するなど、整理されていない箇所が散見されること、② 各ウルスの王族の系譜にしばしば孫を息子とする等の誤りが見られること、③ テュルク・モンゴル曆との照合作業を機械的に行い書物全體に互って誤りを犯していること<sup>7)</sup>、④ イスタンブルのアヤソフィア舊藏本（A. H. 752年4月30日＝1351年6月25日、Aḥmad bn al-Husain bn Sātāqによる筆寫終了の奥書）、それに依據しつつ筆寫者の知見によってヌクタを附したフランス國立圖書館所藏本の計二冊、實質的には一種の寫本しか知られていないこと、以上からすると草稿に過ぎなかった可能性もある（フランス國立圖書館藏の『集史』に附され、イスタンブルのヌール・オスマニエにも傳來する著者不明の『續編』の「オルジェイトゥ紀」と「アブー・サイド紀」は、『ガザンの吉祥なる歴史』の「本紀」の形式にあわせてそれぞれ3部構成とし、末尾に諸國史を附す。前者は『オルジェイトゥ史』の要約・再編<sup>8)</sup>）といつてよい—— 上述の部分についていえば、使者たちの名前は省略されている<sup>9)</sup> —— ものだが、いっぽうで、

より詳しい記述も認められ、かつ文意もきわめて明快である。共通の資料を利用していることは間違いない。ラシードウッディーン『君主の龜鑑』に『オルジェイトウ史』と類似する記述が認められるので<sup>10)</sup>、かれがこの『續編』の「オルジェイトウ紀」のほんらいの著者／總裁官であり、ティムール朝でそのまま利用された可能性もある。しかし、ジョチ・ウルス、チャガタイ・ウルス、カイドウの王国の「正史」が発見されていない現状では、『ヴァッサーフ史』等とともに、歴史の隙間を埋める重要な資料であることは間違いない。

さて、このフレグ・ウルスにむけての大使節團は、『元史』卷二十一「成宗本紀四」の“[大徳七年秋七月（1303年8月14日～9月11日）丁丑]、<sup>ドゥア</sup>土哇・<sup>チャバル</sup>察八而・<sup>メリクテムル</sup>減里鐵木而等、使を遣わして兵を息むを請う。帝は安西王（＝アーナンダ）に命じ軍士を<sup>つしみいませ</sup>慎飭、驛傳を安置せしめ、以て其の來たるを俟つ”、“[十一月（1303年12月9日～1304年1月7日）己卯] 諸王<sup>メゲトク</sup>滅怯禿・<sup>ウルグテムル</sup>玉龍鐵木而を遣わし<sup>チャバル</sup>察八而に使せしむ”といった一連の流れを受け派遣されたものである。しかも、そこから“<sup>オルジェイトウスルタン</sup>Öljeitü sultan 完者都算灘、<sup>われらのウゲ</sup>俺的令旨、<sup>フランク</sup>佛朗國王<sup>スルタン</sup>算灘根底”に始まり、“俺的<sup>われらの</sup>文字は、(A.H.)七百四年裏蛇兒の年の夏的頭の月の舊八日（四月二十三日＝1305年5月16日）に Alivan に有る時分に<sup>かいた</sup>寫來”で締めくくられるフィリップ四世宛の有名な國書——“<sup>いま</sup>如今、<sup>に</sup>天行心を可與され<sup>て</sup>着<sup>テムルカアン</sup>鐵穆耳皇帝、<sup>トクトガ</sup>脱脫、<sup>チャ</sup>察八而、<sup>ドゥア</sup>朶瓦を<sup>かしら</sup>頭と爲す<sup>もの</sup>的每、<sup>もの</sup>咱每、<sup>チンギス</sup>成吉思皇帝の子孫每は、四十五年自り以來、相怪責したことを、<sup>いま</sup>如今、<sup>に</sup>天行護助被れ<sup>て</sup>着、<sup>おほ</sup>衆くの<sup>あに</sup>哥哥・<sup>おとうと</sup>兄弟が<sup>て</sup>相和し<sup>て</sup>着<sup>おひさま</sup>日頭の出る<sup>ところのナンキヤス</sup>的南家思的地面<sup>の</sup>從り<sup>よも</sup>要め<sup>うち</sup> Dalu 海の裏に<sup>の</sup>到り、<sup>の</sup>國を共に<sup>て</sup>拿し<sup>の</sup>着、<sup>の</sup>自らの<sup>の</sup>站<sup>を</sup>每行看せ<sup>した</sup>教め了”<sup>11)</sup> という宣告へと繋がってゆくのである。

各ウルスの使臣として、正使1名・副使2名が挙げられるが、自前の軍を持つ駙馬・有力部族の高官、<sup>オトルク</sup>斡脫集團を抱える財務官僚がその職責を擔うことは、『百萬の書』の3人の使臣（スルドゥス部の兀魯解、オロナウト部の阿必失呵、<sup>アビシユカ</sup>火者）を持ち出すまでもなく、『ガザンの吉祥なる歴史』の記事、教皇廳やフランク國王に宛てた國書等からも確認される。ここで注目すべきは、チャガタイ・ウルスの面々だろう。ほかと異なつて、説明不要、周知のことととばかりに、出身部族等の手掛かりが一切記されないのである。

もっとも、この記事の少し後に“彼處（＝<sup>アム</sup>阿母河）に來て殺されてしまった<sup>テムル</sup>帖木兒の兄弟、<sup>エフゲン</sup>也不干の息子の<sup>ババ</sup>Babā ugūl 八八大王”<sup>12)</sup> なる一節がある。『ヴァッサーフ史』にいう“<sup>チンギス</sup>Čingiz han 成吉思汗（罕）の弟<sup>ジョチカサル</sup>Ğüci-Qāsār 拙赤哈撒兒の曾孫、<sup>エフ</sup>Baqā<Baqa の孫、<sup>エフ</sup>也不干の息子たちの<sup>ババ</sup>八八大王・<sup>テムル</sup>帖木兒”<sup>13)</sup> のテムルと同一人物に相違ない（おそらく憲宗モンケ時代の征西軍の編成、あるいは中央アジアにもともと設定されていたジョチ・カサル家の投下領と関係があろう）。しかも

čaxšapat ay 十二月九日（1307年1月13日）に相當する [A.H. 706] 7月7日金曜日（1307年1月12日）、Timūr ugūl<ogul（≡Mon.kō'ün 大王／太子）<sup>テムル</sup>帖木兒大王と<sup>カイドウ</sup>海都の

『オルジェイトゥ史』が語るアジキ大王の系譜

息子の Sārbān 撒兒蠻<sup>14)</sup>が il<il 歸附<sup>ニ</sup>奉仕の表明を以て参内した<sup>15)</sup>。

とあるように、二年半後にはフレグ・ウルスに亡命してくるのである(『ガザンの吉祥なる歴史』編纂時、ジョチ・カサル家のバガの系譜は知られていなかったが、『五分枝』には記載された。亡命後に仕入れた情報とみることもできるが、この使節團が来たさい、すでに各自が身上書を提出していたか、接見前に調書をとっていたか、あるいは筵席での会話等によって情報を収集していた可能性もある。『ガザンの吉祥なる歴史』の「部族志」には、同じトルイ家の大元ウルスとフレグ・ウルスの間を往来した使臣の情報が少なからず記される)。しかも、ここにサルバンという名も登場する。テムル大王が副使だったなら、正使をつとめたサルバンは当然それより格が上であり、矛盾はしない。『ガザンの吉祥なる歴史』には、

[Üktāi Qān 窩闊台皇帝の第5子 Qāši 合昔の子海都の第15子／第4子\*] 撒兒蠻<sup>サルバン</sup>：  
この撒兒蠻<sup>サルバン</sup>は軍勢とともに阿母河を渡って、Badaḥšān 巴達哈傷<sup>バダフシャン</sup>(八打克沙)・Pangāb の疆域内にいる。常に Hūrāsān への企畫<sup>くわだて</sup>をなしている…<sup>16)</sup>

※系圖では第7子

とあり、“頭哨(先鋒)／莽來<sup>マンライ</sup>(對フレグ・ウルスの最前線)”との冠詞とも合致する。同書が改訂された際には、

A. H. 690 (1291年)に「Naurūz が撒兒蠻<sup>サルバン</sup>・Abūkān ugūl 也不干大王・Üruk-Timūr 月魯帖木兒<sup>オルクテムル</sup>および Yasāūūr 扎撒兀兒<sup>ヤサウル</sup>の臣僚たち等とともに全軍を率い Hūrāsān への企畫<sup>くわだて</sup>以て至りつつある」との聲音が届いた。事由は以下の如くであった。その前、Naurūz が Harāt 哈烈<sup>ハラート</sup>の疆域から敗走した時分、海都の根前に逃げ去き、多くの奉仕の後、軍勢を懇願した。海都は、かれの要請どおりにかれに軍勢を遣わし、かれの背後に自身の息子の撒兒蠻<sup>サルバン</sup>をも軍勢と前去せしめた<sup>17)</sup>。

と書き加えられている。少し前の箇所にも“Naurūz は娘を Nikbai 捏古伯<sup>ネグベイ</sup>の子撒兒蠻<sup>サルバン</sup>に與えていた”<sup>18)</sup>との一文(ナウルズはガザン・カン擁立の立役者だったが、のちに失脚。ネグベイはチャガタイの孫で、バラクの後を継いで三年間、チャガタイ・ウルスのカンの座に坐した)があるから、エブゲン大王の周辺には2人のサルバンがおり、いずれも對フレグ・ウルスの最前線にいたことになる。ドゥアの使臣としては、このチャガタイの曾孫のほうが理解しやすいだろう。ただ、ネグベイにサルバンなる息子がいた記事はほかに確認できず<sup>19)</sup>、カイドウの息子をネグベイの息子と取り違えていた可能性もある。それほどに、中央アジアではチャガタイ家とオゴデイ家の面々が離合集散を繰り返し、混然とした状況だった。サルバン、エブゲン等とともにナウルズに協力したオルク・テムルは、オゴデイの曾孫でカイドウのもとにあり、サルバンと同様、ナウルズの娘を娶っている。そしてなんと、『ガザンの吉祥なる歴史』の改訂作業中——1306年以降の一時期<sup>20)</sup>、かれの父の名をアジキとする誤解が生じていた<sup>21)</sup>。

もうひとりの副使アーナンダがこのオルク・テムルの兄弟だったなら、もはやドゥアの使節團というより、チャバルと立場を異にするオゴデイ家の使節團、それもフレグ・ウルスにとっては全員が因縁の相手たちとなってしまう、友好には程遠い。おそらくこの誤解の原因は、チャガタイ家のアジキにオルクとオルク・テムルという息子がいたからである。しかも、『ガザンの吉祥なる歴史』の改訂作業時に、アジキの息子たちから、このオルク・テムルの名を削除しているのである<sup>22)</sup> (アジキは、クビライがアリク・ブケとカアン位を争ったさい、オゴデイ家のカダアン等とともにいちやく旗幟を鮮明にした<sup>23)</sup>。そのごくビライから大軍を任されて、安西王アーナンダ、同じくチャガタイ家のチュベイ等とともに、オゴデイ家のカイドウ、チャガタイ家のドゥアおよびアリク・ブケ家の諸王等の連合軍に對峙、ビシュ・バリク周邊から西北戦線にかけての站赤の建設・管理をしていた。寧夏府路下の山丹州や太原路の投下領の収益や巨額の“歲賜”・臨時見舞金を享受し、<sup>オルトク</sup>斡脱に貸し付けていたことでも知られる<sup>24)</sup>。これは、アジキの息子自體がフレグ・ウルスで有名になっていないと起こりえない事態である。また、大元ウルスにいるアジキが、息子のひとりに、ながらく共同戦線を張っている安西王アーナンダにあやかたつ名をつけていた可能性はじゅうぶんであり(ちなみに、安西王の息子はオルク・テムルといい、『ガザンの吉祥なる歴史』にも言及がある)<sup>25)</sup>、その息子が、成宗テムル皇帝ではなくドゥアの代理として、フレグ・ウルスに使いしていた——これが事実であれば、東西に分裂していたチャガタイ家<sup>26)</sup>は、この時点でまさに再融合の動きを見せていたことになる。チャガタイ・ウルスの領域の最西端からサルバン、最東端からアーナンダを選んだとすれば、ドゥアの意圖も理解しやすい。

そこで、次節ではその眞偽の検討の材料として、アジキの名が再び登場する『オルジェイトゥ史』の712A.H 條後半部の翻譯を提示する(『集史續編』は固有名詞や文意の讀みに有用なので、特に留意すべき大きな異同や補足については、[ ]に入れて記す)。フレグ・ウルスの史官がほかのウルスのモンゴル諸王の情報をどのように収集・處理していたのか、比較し総合的に見ることができるように、また『オルジェイトゥ史』という書物自體の體裁・性格を考えるために、前後の記事も纏めて掲載する。各ウルスのモンゴル諸王については、可能な限り初出の箇所<sup>27)</sup>に註を附し、大きく2系統に分類される『ガザンの吉祥なる歴史』の諸寫本の記述を併記・紹介する。ここに見られる異同こそ、情報収集の過程の一端を示すものにはかならないからである。紙幅の制限があるため、本稿ではその作業までにとどめざるをえないが、別の機會に、この712A.H 條について、『ヴァッサーフ史』の記述等と比較しながら詳細に解説し、『オルジェイトゥ史』の2つのアジキの記事のあいだに挟まれた約10年の中央アジアの情勢を眺め、ひいてはフレグ・ウルスの歴史書編纂を見直してみたい。

## 2. 『オルジェイトウ史』 A. H. 712 條<sup>27)</sup>

續いて [712A. H] 12 月 10 日の日曜日 (1313 年 4 月 8 日), [脱脱<sup>トクトア</sup>／脱脱<sup>トクタク</sup>]・寶位<sup>ウズベク</sup>・王冠<sup>ウズベク</sup>の繼承者たる朮赤<sup>ジョチ</sup>の國<sup>ウルス</sup>・欽察<sup>キプチャク</sup>帽<sup>カ</sup>の諸城鎮<sup>カン</sup>の君主 (=汗), šahzādah Ūzbek 月即伯 (月思別<sup>バイ</sup>／月祖伯) 王<sup>フカ</sup>／太子<sup>エルチ</sup><sup>28)</sup>の elči 使臣<sup>エルチ</sup>たちが, 先導<sup>エルチ</sup>の Kük-Timür kürkän<Kök-Tämür güregen 闊帖木兒<sup>キョクテムルギュレゲン</sup>駙馬<sup>バイナル</sup>・Baināl 伯納<sup>バイナル</sup>／伯亦難<sup>バイナル</sup>・[Bāi-Būqā<Bai-Buqa 拜不花<sup>バイフカ</sup>／Tāi-Būqā 泰不花<sup>タイフカ</sup>] とともに到着し, 突厥<sup>テュルク</sup>の ud yil 丑年の節日に aūlgāmiši<Mon.a'ulja 拜見した。

ところで, 月即伯<sup>ウズベク</sup>の紀傳<sup>トクトア</sup>・かれの最初の故事は以下の如くであった。脱脱<sup>トクトア</sup>の治世の末に<sup>29)</sup>, Hurdū<Ordo 斡兒朶<sup>オルダ</sup>の息子 (孫) Tūnīgi<Qoniči 火你赤<sup>コニチ</sup> (火尼赤) が亡くなったが, かれには忘れ形見たる二人の息子が残っていた。年長の Bāyān<Bayan 伯顔<sup>バイヤン</sup>と年少の MWMKQTAY<Mon. Mau-Mangqutai 馬兀<sup>マウ</sup> (＝歹<sup>わい</sup>) 忙忽台<sup>マングタイ</sup>／Muskiqutay 執謬人<sup>ムスキクタイ</sup>・冤屈<sup>ムスキク</sup>抱く者<sup>ムスキク</sup><sup>30)</sup>。父の繼承者たる伯顔<sup>バイヤン</sup>が ulus 國 (國土) と čerig 軍 (軍馬) を擁していたが, 馬兀忙忽台<sup>マウマングタイ</sup>がかれに背き, かれをば mulk 王國<sup>ウルス</sup> ≡ 國 から敗走せしめ, かくて [脱脱<sup>トクトア</sup>のもとに] 轉がり込んできた。脱脱<sup>トクトア</sup>は血に飢えた大軍とともにかれの救援・救助に措置を下した。馬兀忙忽台<sup>マウマングタイ</sup>は逃亡し, 父の座は再び伯顔<sup>バイヤン</sup>に確定された。脱脱<sup>トクトア</sup>は夏・灼熱の季節に歸還せんとし, 自己の甥, Tuğrik<Toγril 脱隣<sup>トグルル</sup>の子月即伯<sup>ウズベク</sup>を Kübluk<Köprük の兄弟 Aqšah<Ūšanān<sup>31)</sup>とともに諸軍の頭に置き, 自身は出立の手綱を dār al-mulk 京師 (御座所) ≡ 根脚の yurt 營盤<sup>ユルト</sup> (=Mon.nuntuq) に向けた。行路の辛苦から, とある小疾がかれの健康に現れ, 病原が體質に勝った。かくて, 712A. H. の 4 月 4 日の水曜日 (1312 年 8 月 9 日), Saray の疆域へ, Atil (=ヴォルガ) 河を渡っていた船の中で逝去した。好き統治が積み重ねられ, 迫害はほとんどなく, 辛抱する我慢強さが沈着・忍耐と共にあった [かの諸國は, かれの朝廷の時代に繁榮の極致に至り, かれの國は財・富が集積された]。

そのご, 國<sup>ウルス</sup>の amir 臣僚たち ≡ noyan 官人<sup>ノヤン</sup>たちが [“即位” 一つに集まった／王權の問題について議論した]。諸王について, Saray の官人 Qutluğ-Timür<Qutluγ-Tāmür 忽都魯帖木兒<sup>クトル</sup>が言ったものである。[[俺<sup>われら</sup>毎は脱脱<sup>トクトア</sup>の兒子<sup>カン</sup><sup>32)</sup>を汗位に推戴せん。何<sup>なんとなれば</sup>者<sup>その</sup>, 他的父親の勤功<sup>いさおし</sup>は俺<sup>われら</sup>毎<sup>にたいし</sup>根底<sup>ウズベク</sup>多いので有る。しかし, 『最初に月即伯<sup>ウズベク</sup>を招き, 最良の方法で他を中央から排除せん (俺<sup>われら</sup>毎<sup>は</sup>)』 廢道, 文契<sup>カ</sup>を以てせん／汗位は脱脱<sup>トクトア</sup>の兒子<sup>カン</sup>那的<sup>カ</sup>毎<sup>の</sup>に屬し着有る。しかし, 最初に須らく月即伯<sup>ウズベク</sup>への企畫<sup>クワダテ</sup>を做す可し<sup>ナ</sup>]。何<sup>なんとなれば</sup>者<sup>かれ</sup>, 他は王國の敵<sup>カ</sup>で有る。自後, 脱脱<sup>トクトア</sup>の兒子<sup>ウルス</sup>を國<sup>シ</sup>の寶位<sup>シ</sup>に即位<sup>シ</sup>せ教<sup>シ</sup>め也者 (俺<sup>われら</sup>毎<sup>は</sup>)』と。これに一致した。月即伯<sup>ウズベク</sup>は脱脱<sup>トクトア</sup>の生天 (死亡) の消息を聞いたので, 軍を残して慌ててやって来た。[ある人がか

れに背信棄義の<sup>ノヤン</sup>官人たちの策略・陰謀・奸計を知らせた／臣僚たちの熟考・思案に氣づかなかつた。やはり忽都魯帖木兒という名のある臣僚が月即伯にかれらの策略を知らせた]。

[（そもそもは）かれが臣僚たちに salām 平安の挨拶と imān 信仰の責を問わんとするがために、臣僚たちの領袖が言うには「<sup>ああ</sup>、<sup>なんじ</sup>君よ、<sup>われらにたいし</sup>ムスルマンは俺毎根底木速魯蠻たることでは無く、<sup>もとよ</sup>恭順・服従を要め者。<sup>どうしてわれら</sup>怎生俺毎に Ġinkiz-hān 成吉思汗の yasa=Mon.jasaq 扎撒・yo-yosun 體例から、<sup>いかなる</sup>甚麼不平有り <sup>シャリーア</sup>聖法 <sup>アラブ</sup>以て阿拉伯の長袍を召喚せ教む麼（<sup>なんじ</sup>你是）？」と／臣僚たちの月即伯への敵意の原因は、<sup>ウズベク</sup>月即伯が絶えずかれらに信仰の責と Islām をなさしめ、かれらにそれを熱心に勧めたことにあつた。臣僚たちはかれの麻痺について言ったものだ。「<sup>なんじ</sup>你是俺毎根底服従・從順を望者。<sup>われらにたいし</sup>你を教法・信仰と共に、俺毎は甚麼の勾當有らん。俺毎は<sup>どうしてチンギス汗</sup>怎生成吉思汗の <sup>ジャサク</sup>töre 道理・yasaq 扎撒を放棄し着阿拉伯の教法に入る麼？」]。[<sup>ウズベク</sup>月即伯はかれを（199a）殺した。ほかの臣僚たち<sup>ノヤン</sup>官人たちは、かれの（イスラーム法では）行わない方が望ましいが不法ではない行為について恐れ慄き憎悪し／かれはこの意義に固執し、かれら<sup>ウズベク</sup>はかれについてこの事由以て恐れ慄き憎悪し]、かれの<sup>いのち</sup>生命への企圖<sup>くわだて</sup>以て <sup>そうだん</sup>gāngās 商量・一致したのだつた。<sup>うたげ</sup>宴の最中にかれの勾當を始末するべく、招待した。<sup>ウズベク</sup>月即伯は <sup>トイ</sup>toy 祝延に出席した。二・三の紅紫の杯を歌曲の伴奏で飲んでみると、[ある臣僚<sup>クトルクテムル</sup>忽都魯帖木兒]がかれの起立に目くばせで合圖した。<sup>ウズベク</sup>月即伯は疑念を抱きつつ、<sup>かわや</sup>厠に起ち、用を足した。かの臣僚がかれの後を追ってきて、臣僚たちの陰謀・奸計の策略をありのままかれに述べた。<sup>ウズベク</sup>月即伯は直ちにその足を駿馬に乗せて逃げ、數千人を自身のもとにかき集め、かれらの氣力・援助によって歸還した。そしてかれらへの企圖<sup>くわだて</sup>以て機先を制した。臣僚たちの全てを [100 餘りの諸王／<sup>チンギス汗</sup>成吉思汗の <sup>ウルク</sup>子孫に屬する 120 の諸王<sup>トクトア</sup>・脱脱の息子とともに捕え殺した。いっぽうで、かの臣僚を慰撫・照顧し、自身の諸祕密の語り部・顧問・親信にした。[かれは、長期間に互って <sup>キブチャク</sup>欽察草原・<sup>ホラズム</sup>Hwārazm 花刺子模の諸城鎮において統治をなした、かの<sup>クトルクテムル</sup>忽都魯帖木兒である]。かくて [自らは／<sup>ウズベク</sup>月即伯は]、[<sup>ジョチカン</sup>朮赤汗の] <sup>ウルス</sup>國の王座に即位し、自身の登極の吉報を以て使臣たちを諸國周邊・四方八方に遣わしたのだつた。[<sup>ウズベク</sup>月即伯は姿・性質・教法の賜りものたるあらゆる才藝を有し、<sup>ムスルマン</sup>木速魯蠻の力を以て、慈善事業に關わる王／太子だったのである]

この時期、<sup>ドゥア</sup>Dūa 篤哇の息子 <sup>Äsän/Esen-Buqa</sup>Äsän/Esen-Buqa 也先不花<sup>33)</sup>は、<sup>カアン</sup>qān<qa'an 皇帝と敵になっており<sup>34)</sup>、後尾から何人かがかれへの企圖<sup>くわだて</sup>をなさぬよう、<sup>ウズベク</sup>月即伯がかれと友・良好たらんことを願っていた。そこで、かれに「皇帝は『<sup>カアン</sup>月即伯は汗位に相應しくも君主に適當でも無い。<sup>ジョチカン</sup>朮赤汗の位次・<sup>トクトア</sup>脱脱の位階は、別の太子に委付せんこと討求す（俺は）』麼道、<sup>われとて</sup>宣し着有る也」との信書（<sup>ウズベク</sup>宣託）を送った。<sup>ウズベク</sup>月即伯はこの棘ある話から<sup>カアン</sup>皇帝に對し反逆者・敵となつた<sup>35)</sup>。

側近・inaq<sup>イナク</sup> 倚納 (=親信／寵信<sup>もの</sup>的) であった例の臣僚 [忽都魯帖木兒] <sup>クトルクテムル</sup> が月即伯に謂うには「若し (您<sup>あなた</sup>が) 我の評決・同意, 我との商議以て勾當を做さんこと討求する呵, 皇帝<sup>カアン</sup>と敵たるを休められ者。何<sup>や</sup>者, 他は創造主 (=上天) の福蔭<sup>うち</sup>の裏に有る。他へのil 歸附・服従・歸順を以て您<sup>あなた</sup>は國の全てに統治・支配が可能に成る也者。長生に諸々の災禍・疫病・不幸・敵襲から庇護され, 安祥で有る也者 (您<sup>あなた</sup>は)。也先不花・Ġagātāi <Ča'adai 察合台の uruq 子孫との友愛・歸順の放棄を説われ者 (您<sup>あなた</sup>は)」と。月即伯は聰明<sup>ゆえ</sup>の故にかれの判断を選択し, 也先不花の訓告・約會は無効・空虚となり, かれらの同盟は放棄された。かくて, 冬の眞ん中に, 和解・和平の道について, 皇帝<sup>カアン</sup>の御前に急遽<sup>エルチ</sup>の使臣たちを差し向けた<sup>36)</sup>。

かれらの歸還の後, 同様に使臣<sup>エルチ</sup>たちを友愛・協調・和平以て Ūlgātū Sultān < Ūljeitū soltan 完者都算灘 (鎮潭 = 王 / 汗) の御許に遣わした。716A. H. の6月10日 (1316年8月30日) 712A. H. の6月10日 (1312年10月13日) / 712A. H. の12月10日 (1313年4月8日) 付けを以て, (199b) 欽察<sup>キプチャク</sup>の Darband 達耳班<sup>ダルバンド</sup>の道から Gurgistan の田地 (邦土) を經由して, 50 匹の ulaq 鋪馬<sup>ウラク</sup>と共に Sultāniyyah 孫丹尼牙<sup>スルターニーヤ</sup>に到着した。信書 (宣託) の内容は, 以下の如くであった。「你<sup>なんじ</sup>は aqa 哥哥, 俺<sup>われ</sup>は ini 兄弟, 俺<sup>われら</sup>毎の間には協調 [・友愛] の慣習が行踏し着有る。若し 軍<sup>チェリク</sup>を必要とし着有る呵, 不揀甚麼討求であっても派遣する也者 (俺<sup>われら</sup>毎は)。但し, Īrān zamīn 國土の諸城鎮・諸州<sup>つ</sup>に據いて, Mangū-Qān < Mānggū qa'an 蒙古皇帝 (= 蒙哥) の yarliq (= Mon.jarliq) 聖旨<sup>ジャリク</sup>の敕命を以て俺<sup>われら</sup>毎の haqq 報酬／權利<sup>もの</sup>で有る<sup>いかなる</sup>は不揀甚麼物件<sup>もの</sup>であっても俺<sup>われら</sup>毎の人毎に付與<sup>よ</sup>せ者。然れば, 不通の諸路は開かれ, 共々に堆積混亂<sup>うち</sup>の裡に腐り朽ち着有る<sup>てい</sup> 的<sup>ところの</sup> 並びに兩方面からそれが必要で有る<sup>ところの</sup> 的<sup>ところの</sup> 雙方の諸の商品・布帛を相互に送付する也者 (←俺<sup>われら</sup>毎は)。亦た商賈<sup>たち</sup>毎, 隊商<sup>たち</sup>毎が利益の爲に往來する也者」と<sup>37)</sup>。算灘は使臣<sup>エルチ</sup>たちに, 求情・siürgāmiši < Mon. soyurqa-賞賜／恩賜・慰撫の後, 放棄の裁可を與えられた。

712A. H. の [巡禮月] 12月15日の金曜日 (1313年4月13日), [Isma'il 亦思馬因派 / Šām] の狂信者たちが Mišr 迷思耳<sup>ミスル</sup>の Našir 納昔兒<sup>ナスイル</sup>の命令を以て Ītqūli < Īt-qulī 亦都忽立<sup>イトクリ</sup>を刀で刺し, 即死した。この歳に, 迷思耳の跛子の納昔兒は軍勢と共に Halab アレppo・Furāt ユーフラテス河の沿岸に來たつた。[Diyārbakr の管理者であった] 臣僚の Sūtāi < Sutai 速台<sup>スタイ</sup>は機会をつかみ, かれの兵士たち全員を切らせ, かれらの糧食を略奪した。

712A. H. の巡禮月 12月17日の日曜日 (1313年4月15日), [神に保護されたる孫丹尼牙<sup>スルターニーヤ</sup>での yāilāmiši 駐夏の意圖以て / 移動せる吉祥の諸旗の騎 (完者都算灘) は qisilāmiši 住冬 > 駐夏の意圖以て孫丹尼牙<sup>スルターニーヤ</sup>方面に動いた。] 諸 ordo 翰魯朶 (= 宮帳) の後方より hwa-

ğah Tāğ al-Dīn ‘Alīšāh 火者答朮 丁 阿里沙の追従。12月28日の水曜日(4月26日)、福廡の諸旗が Hamadān は Sultān-ābād の kūšk 涼亭への到着。この日、Pulād Čingsāng/Fulād Čingsāng < Bolad/Bolod 孛羅朮丞相が Arrān の草原にて qislaq 住冬の營盤に死去した。

ところで、也先不花の紀傳・察合台の國におけるかれの統治は以下の如くであった。

Kūncāk 寬徹 (寬闊/款徹)<sup>38)</sup> の不可避の諸狀況・逝去の後、かれの座に Čagādai 察合台の子 Qadaqi < Qadaqi/Qadagi 合答吉の子息 Naliqū 納里忽 —— その母は Turkān < Türken 忒里蹇, Kirmān 乞里茫の Sultān Rukn al-Dīn の娘であった —— が据えられた。‘Ali uğul 阿里大王 [と] 兄の Dū al-Qarnain —— Dūa 篤哇の hašš emcū 梯己の šāhib 司であった —— は、二人とも納里忽の甥であった。篤哇の子孫は、かれの地位に對して、打ち碎かれ・望みを断たれ・抑え込まれた。察合台の子 Būri 不里の子 Ağiqi oğul 阿只吉大王の息子 Ūruk < Öruk 月魯は、かれに反抗し言った。「篤哇的兒子毎の地位根底、別人を他毎の座次・國の君主に在ら教むるとは、怎生相應ならん? 清河の有るにも盡管、墓土を以て tayammum 代淨が許されよう麼?」。月魯大王がかれの座に定められた。納里忽は知るや、騎乗の隨従たちとともに前去し、(200a) 月魯を捕え、直ちに殺害した<sup>39)</sup>。敵どもに勝利・凱旋し、篤哇の子孫について用心深くなり、政府の親信たちを側近たちに「俺毎的諸州を國の利益たる策は、是れ、篤哇的 ūrūg < uruq 子孫/a’uruq 老小營を完全に撲滅し、他毎的后裔を途絶・断絶せしむること(←俺毎が)の裡に有る也」とて相談した。顧問の臣僚たちの1人、Bašiyār の子親信の Kirāi 怯來は直ちに篤哇の最年少の息子の Kebek 怯別に「自己を納里忽の危害から守者。塗抹の企圖以て篤哇的毎都を狙撃し・隙を窺つ着有る也」とて警告した。怯別は驚愕・茫然自失したまま、その恐怖・畏懼・害怕・絶望から Ūzun Bahādur < Uzun ba’atur の房に入って涙し、呻き、不吉なる運命の時・審判の日々の抹殺に對し、助け・庇護を求め、Uzun の下肢を掴み、企圖の狀況・納里忽の事案を述べ立てた。Uzun ba’atur はかれに同情し、かれへの助力・敵たちの無力化を以て「高潔な魂が體軀の裏に流れ巡つ着有る限り、Kūbak < Köpek 怯別の援助者・支持者で有る」との嚴肅なる誓いを飲んだ。そしてかれと「我は梯己の百騎と一同に、怯別と他的兄弟の Abūkān < Ebügen 也不干は二百騎と一同に敵たちの撃退に參集、狙撃すべし」とて、gāngāš 商量した。Uzun ba’atur が説うには「matars 休恐れ者。maharās 憂うること勿れ<sup>40)</sup>。明日、納里忽的祝延を以て、中間・間隙の裏に乘じよ、我が好機に祝延から出で來よう。敵毎が那的に耽溺する時分に、您は納里忽的幹魯朮の四方従り諸火を點け者。俺毎は三百の nökör 伴當と一同に迅速に敵毎を打とう也、都撲滅しよう也」と。(かれらは)斯様に倣して、寢臺の上で泥酔した

ナリクに勝利し、ノコル伴當たち・息子たち諸共に殺した。有能でかれを王座に坐せしめた厭わしき大臣も殺害した。臣僚たち・軍勢たちはその面を Kūbak 怯別に向け、察合台のウルス國の統治権は、刀傷以てかれの上に確定・委託された。

三日後、相次ぐ敵の來襲の消息—— Kiük<Güyük 貴由の息子 Tügme<Tügme トクメ (禿麥)<sup>41)</sup> と Ğabār 察八兒太子 (王)<sup>42)</sup> が三十萬の軍ととも怯別の生命を狙い至りつつあること—— が知らされた。怯別は自身の兵士たちとともに Quyās<Qunās<sup>43)</sup> の宿頓から出發し、TWYRMAY に安下した。かの陣地において、禿麥と察八兒は軍團の yāsāmiši<Mon.jasa 整治を做して、怯別を攻撃した。雙方より苛烈な戦闘・緊迫した交戦が進行した。怯別は潰走・退却し、かれの軍は四方八方に散った。Dū al-Qarnain の弟阿里大王が大軍と共に Ūzkand 兀思干にあり、(200b) 千戸の軍官 Araq 阿剌と二人とも各々自身の軍團と共に怯別の援助を以て連合した。Mubārak-šah 木八剌沙の息子 (孫) Šaiḥ Timūr も<sup>[補2]</sup>、自身の軍團とともに援助・援護を示し、一緒に禿麥の背後に前去了。兩勢は Qunās に於いて遭遇した。期せざる邂逅の後、戦闘になった。禿麥は潰走し、Qalāūz<Qala'un/Qalawun カラウン合剌温と共に Turkistān トルキエの地の諸城鎮に入り、脱脱の il 仲間となった。怯別は一千騎を選び、禿麥の追跡に遣わした。冬の季節に禿麥に追いつき、かれを捕獲し、殺した。春に歸還した。

まさにこの時期に、Ḥaišānk<Qaišan カイシャン海山太子 (=武宗) を以て政權交替に及んでおり、カアンウルス皇帝の國の王座に確定・安住し、察八兒に信書を付與して、かれに對し分配の施惠・恩惠・siürgāmiši 賞賜各種を以て命じ、「他的兄弟毎の主・頭に在ら教め者」とて、父の座をかれに委付した。察八兒は七千騎と一千五百匹の鋪馬ともども、兄弟 Yangičār<Yangičār ヤンギチャル<sup>44)</sup>と一緒にカアン皇帝の御前に出立した (=入覲)。カアン皇帝はかれの娘たちを臣僚たちに與え、后妃たちには自身の諸營盤に對して離去・收回の批准を與えた<sup>45)</sup>。

いっぽう、怯別は Pūlād kūrkān<güregen 孛羅駙馬を書翰以て皇帝の宮廷に遣わした。奏するには「納里忽は俺毎の父親の位階を強奪・横領して有來。俺は大なる上天の氣力の裏に、皇帝の福蔭の裏に、他から奪取し來也。亦た禿麥も敵・叛逆者と做つ來のため、除去し來也。今自り以後、カアンにちからを添えることを請い願う (俺は)」と。カアン皇帝は、それを嘉し、かれに siürgāmiši 賞賜を命じた。

察合台の諸州の國の實位は、怯別に落ち着き、かれへの援助・援護を命懸けで做して前赴していた阿里大王に婚姻を準備して丁重に慰撫し、Ḥutan 斡端 (忽炭) の地土の諸州・統治をかれに授け、途魯吉の地の疆域全てをかれの判断・才覺次第となした。七つの yam (=Mon.jam) 站を通過してしまつた後に、かれの踪跡に對して騎乗の隨從たちが差し向けられ、結果、かれは道半ばに伴當たち諸共、卑劣・殘酷に殺され、路の塵埃の上に投棄された。何者、大膽不敵な丈夫、ba'atur 拔都兒≡勇士であつたが故に、かれ

の叛亂・bulyaq<sup>ブルガク</sup> 内亂を恐れたのだった。

怯別は國の寶位を解き放ち磨き淨め、Negüder<sup>ネグデル</sup> 捏苦迭而（納忽答兒）たちの集團および Hindustān<sup>ヒンドゥ</sup>（忻都田地）の疆界に對して知事・長官だった長兄の也先不花の根前に、「諸州の寶位・王冠は諸々の混濁の瑕疵根底磨き淨め來也（俺は）。(201a) 敵毎を都打ち倒し來也（俺は）。王座を您的爲に掌握・解放し來也（俺は）。隨即到日を夜[までと／と共に]説わず、面を政府の tahtgāh 御座所（都）に向けるべし。好久之期間、寶位と王冠が伴當と主上無く残つ着有る<sup>てい</sup> 的<sup>ところ</sup>の<sup>チェリク</sup> 軍と國を識者」とて、吉報を交えた信書を送った。也先不花は、この吉報の喜訊によって、與えられし生命を、吹かれ飛びゆく浮世の身より歡喜・興奮に震えんとて願った。最年少の弟 Īt-qūl<Īt-qol/It-qol に自身の座を以て捏苦迭而たちの頭<sup>かしら</sup>に据えて、Bini-yi gāu（牛の鼻）<sup>46)</sup> の營盤から阿母河の方角に、面を察合台の御座所・Qunās に向け、稻妻・流星のように、遷移に遷移、前去し續けた。政府本部の疆域に到着すると、怯別は直ちに政府の柱石たちとともに、かれを出迎えた。對面にあたっては、成吉思汗の<sup>チンギスカン</sup> uruḡ 子孫の<sup>ウルク</sup> 諸の慣習・體例の如く、みな帽を頭から脱ぎ、帶を項に架け、也先不花大王を王國<sup>ウルス</sup>の寶位に即位させた。かれは王國の寶位に確立すると、弟怯別を Farḡānah の諸州・Mā warā' al-nahr の田地（邦土）の守護、さらには Kiš 碣石と Naḡṣab<sup>ナフシャブ</sup> 那黑沙不の疆域に遣わした。ちなみに、暴動・叛亂・内亂の時まで、かれはかの疆域にて yāilāmīši 駐夏をなしていたのだった。

ほかに、この歳の數箇月、臣僚の [Tarmatas/Tarmatāz]<sup>タルマタス</sup> 答里麻塔思が Rūm の田地に派遣されたが、Qunqūrtāi<Qonqoltai<sup>コンコルタイ</sup> 晃火兒台の息子 Qūrumīši<Qurumši<sup>クルムシ</sup> 忽林失——暴燥・憤怒・錯亂がかれの行動を制壓・支配しており、かれの營盤<sup>ユルト</sup>は Rūm 諸國の疆域に屬する Mūš の地土の宿頓に在った——が高官たる四子とともに扎撒<sup>ジャサク</sup>の救命の裏に入去せ交め被れ來ためである。712A. H. 5 月（1312 年 9 月 4 日～10 月 3 日）に歸還した。

## 附 記

本稿は、文部科學省科學研究費補助金（基盤研究 C）19K00939「東西資料からみたモンゴル、ポスト・モンゴル時代の軍事と外交」による研究成果の一部である。

## 註

- 1) 『元史』卷一〇「札八兒火者傳」
- 2) 『元史』卷二十一「成宗本紀四」“[大德十年三月（1306 年 4 月 14 日～5 月 12 日）乙未] 給千家木思答伯部糧三月”は、あるいは歸還後の慰勞金かもしれない。

3) 原文は、

اسامی ایلیچیان قان : نماچی از سلدوس و تورچیان از قوم جلالیل و مصطفی خواجه از نسل جعفر خواجه  
اسامی ایلیچیان چاپار : ایسنتمور از نژاد جلایر و نام اصلی او جعفر ست و اورس بهادر از هزاره قاوغتای  
اسامی ایلیچیان دوا : ساربان مانغلی [و] تیمور پسر ابوکان [و] آنده پسر اجیقی

となっている。後掲註 6 に挙げる校訂本・翻譯では、<sup>チヤバル</sup> 察八兒の<sup>エルチ</sup> 使臣たちの名は、① 札刺兒一門の也先帖木兒で、かれの本來の名は Ġāfar である ② Qāvġatāi 千戸に屬する Ūrus bahādūr 斡羅思拔都兒”と解するが、そうであるなら<sup>オロスバートル</sup> 斡羅思拔都兒の後に關係代名詞の <sup>ケ</sup> を置いて説明するのが普通ではなからうか。と <sup>ノム</sup> 名との間にほんらい別の人名と <sup>ケ</sup> があつた、すなわち “小名が Ġāfar である□□” だった可能性もある。<sup>ドゥア</sup> 土哇の<sup>エルチ</sup> 使臣たちについては 2 箇所 <sup>ウ</sup> が脱落している。あるいは、カーシャーニーの自筆原稿では <sup>ウ</sup> は書かれておらず、代わりにそれぞれ空格・本名を確認して記入するための空欄が設けられていたのかもしれない。いずれにせよ、<sup>カン</sup> 皇帝および<sup>ドゥア</sup> 土哇の<sup>エルチ</sup> 使臣たちの列擧法からすると、ここの箇所は不自然である。

- 4) ウイグル文字では TOOA と綴られる。漢字音からすればドウワと讀む可能性が高いが、TOWA とは記していないので、ドゥアと表記する。Geng Shimin et James Hamilton, L'inscription Ouïgoure de la stèle commémorative des Iduq Qut de Qoço, *Turcica*, Tome 18, 1981, 亦隣眞「至正二十二年蒙古文追封西寧王忻都碑」(『中國民族古文字研究會第二次學術討論會論文』1983 年 10 月 のち『亦隣眞蒙古學文集』內蒙古人民出版社 2001 年 pp. 627-746. に收録)。
- 5) ほかの箇所では、manqlāi と綴られることが多い。
- 6) Abū'l-Qāsim 'Abd-Allāh bn. Muḥammad al-Qāshānī, *Tārīḥ-i Ūljāitū Sultān*, MS: Istanbul, Süleymaniye kütüphanesi, Ayasofya 3019/3, f. 150a, f. 154a, f. 154b, MS: Paris, BnF, suppl. persan 1419, f. 21b, f. 28b, M. Hamblī (ed), *Tārīḥ-i Ūljāitū*, Tehrān, 1969, pp. 31-32, pp. 41-42, M. Parvisi-Beger, *Die Chronik des Qāshānī über den Ilchan Ölgāitū (1304-1316): Edition und kommentierte Übersetzung*, Göttingen, 1968, p. 39, pp. 48-49, text, p. 31, pp. 42-43.
- 7) 國事に參與していた宰相ラシードウッディーンには有り得ない過失である。『ガザンの吉祥なる歴史』の「ガザン・カン紀」の記事(イスタンブル本系統のテキストでは、即位後の記事からは、イスラームへの入信との關係で、あえてテュルク・モンゴル曆を附していない。ここでカーシャーニーが形式的に復活させていることは、『集史』第二部のみならず第一部も自身の著述だと主張したいがための、證據づくりにも見える。なお、カイドウの死も、『ガザンの吉祥なる歴史』やジャマール・カルシーの『明解辭典補遺』の記述より一年遅くなっている。宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』(名古屋大學出版會 2018 年 pp. 939-940)。
- 8) *Ḍail-i Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Paris, BnF, suppl. persan 209, f. 443a-483b, MS: Istanbul, Nur-Osmaniye 3271, f. 1b-38a.
- 9) *Ḍail-i Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Paris, f. 447b. l. 1-11, MS: Istanbul, f. 5a. l. 18-f. 5b. l. 1-2.
- 10) Rashid al-Dīn Fazl-Allāh Hamadānī, *Majmū'ah-yi Rashīdiyyah (Mabāḥith-i Sultānīyah)*, MS: Istanbul, Nur-Osmaniye 3415, f. 117a-146a, MS: Iran, Gulistan Palace 2235, f. 170b-175b. 『モンゴル時代の「知」の東西』 p. 609.
- 11) A. Mostaert & F. W. Cleaves, *Les lettres de 1289 et 1305 des Ilkhan Arḡun et Ūlġeitū à Philippe le Bel*, Harvard-Yenching Institute, 1962, pp. 55-56, planche VII-XII
- 12) *Tārīḥ-i Ūljāitū Sultān*, MS: Istanbul, f. 151b-152a, MS: Paris, f. 24a, *Tārīḥ-i Ūljāitū*, p. 35, *Die Chronik des Qāshānī über den Ilchan Ölgāitū (1304-1316)*, p. 42, text, p. 35.
- 13) Shihāb al-Dīn 'Abd-Allāh Sharaf Shirāzī, *Tajziyat al-Amṣār wa Tajziyat al-A'sār*, (*Ta'riḥ-i*

Vaşşāf), Bombay, p. 509, MS: Istanbul, Nur-osmaniye3207, f. 194b. ちなみに、杉山正明「ふたつのチャガタイ家」(『明清時代の政治と社会』1983年 のち『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会 2004年 pp.288-333. に収録) のp.308に引用される『ヴァッサーフ史』は、正しくは“Činggiz-qan の後裔のうち、Būri の曾孫、Ahmad の孫、Šadi の子たる Türe oğul”である。

Šu'ab-i Panğgānah, MS: Istanbul, Topkapı Sarayı Müsesi Kütüphanesi, Ahmet 2937, f. 104a./Mu'izz al-Ansāb, MS: Paris, BnF, Ancien fond Persan67, f. 9a-11b.

Yisükāi-Bahādur — Ğüci-Qāsār — Bāqah — **Abkān** 也 不 干 — **Timūr** 帖 木 兒 · **Bābā-bahādur** 八 八 拔 都 兒

Hāfiz Abrū, *Zubdat al-Tavāriḥ-i Bāysunguri*, MS: Istanbul, Fatif4370/1, f. 21a.

イエスゲイ・バートル(チンギス・カンの父だった)の子ジョチ・カサルの子Bağadの子AMKAN<Emegen 也 滅 干 子 ANWKAN< 也 不 干 子 八 八 拔 都 兒 子 Sūdāi<Sutai 速 台 子 Tuğā-timūr<Tuqa-temūr 脱 哈 帖 木 兒 子 pādšāh 君 主 / 汗 の 名 號 が 與 え ら れ て い た。

- 14) *Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Paris, BnF, suppl. persan209, f. 174b, MS: Istanbul, Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Revan1518, f. 136a, f. 138a, MS: Taškent, Abū Rayhun Birūni Institute of Oriental Studies, 1620, f. 107b, f. 109b.
- 15) *Tāriḥ-i Ūljāitū Sultān*, MS: Istanbul, f. 159b, MS: Paris, f. 37a, *Tāriḥ-i Ūljāitū*, p. 54, *Die Chronik des Qāšāni über den Ilchan Ūlğāitū (1304-1316)*, p. 58, text, p. 54. *Dail-i Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Paris, f. 450a, MS: Istanbul, f. 7b.
- 16) *Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Paris, f. 174b, MS: Istanbul, f. 136a, f. 138a, MS: Taškent, f. 107b, f. 109b.
- 17) *Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Istanbul, f. 273b, MS: Taškent, f. 246a.
- 18) *Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Paris, f. 337b, MS: Istanbul, f. 272a, MS: Taškent, f. 244b.
- 19) *Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Rampur, Raza Library, 2015, p. 52, St. Petersburg, PNS46, f. 111a.

察 合 台 の 第 8 子 撒 兒 蠻 : か れ に は ふ た り の 息 子 が あ っ た 。 Qūšiqai · Nikbāi.

*Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Paris, f. 212b, MS: Istanbul, f. 170a, f. 171b, MS: Taškent, f. 142a.

察 合 台 の 第 4 子 撒 兒 蠻 : か れ に は ふ た り の 息 子 が い る 。 [か れ ら の 名 前 は ] Qūšiqai · Nikbāi.

Šu'ab-i Panğgānah, f. 121b, *Mu'izz al-Ansāb*, MS: Paris, f. 36b.

Ġinkiz hān/Ġinkiz hān — Ġādāi hān/Ġāgatāi hān — Sārbān — Nikbai

*Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Rampur, p. 59, St. Petersburg, f. 113b, MS: London, BL, 16688, f. 17b, MS: Paris, f. 216b, MS: Istanbul, f. 174b, MS: Taškent, f. 145a.

Bālāq 八 剌 の 死 後 , [ 察 合 台 / か の ] 國 の 統 治 權 は , か れ の 従 兄 弟 , [ 撒 兒 蠻 / 撒 兒 蠻 ] の 子 の **Nikbai** 捏 古 伯 に 與 え ら れ た 。 三 年 間 , 君 主 ( ≡ 汗 ) で あ っ た 。 そ の 子 , 察 合 台 の 第 7 子 で あ っ た Qadāqī\* の 息 子 の Būqā-Timūr 不 花 帖 木 兒 に 與 え ら れ , し ば ら く 君 主 で あ っ た が , 脱 毛 症 に 苦 し む こ と と な っ た 。 か れ の 全 て の 髪 ・ 鬚 が 抜 け , そ の 疾 病 の 裡 に 身 罷 っ た 。 か れ の 後 は , 海 都 が か の 國 の 統 治 權 を 八 剌 の 息 子 の Dūa 都 瓦 に 與 え た 。 そ し て 現 在 , か れ が 居 る が , 昨 年 [A.H. 610 年] , 海 都 と 一 緒 に , 皇 帝 の 軍 勢 と の 戦 闘 裡 に 傷 を 喰 ら っ た た め に , 病 氣 ・ 虚 弱 で あ る 。 海 都 は そ の 傷 に よ っ て [ 死 ん だ / 亡 っ た ] 。 か た や 都 瓦 は そ れ か ら 病 氣 [ が 續 い た が / と な っ た が ] , [ そ の ] davā 治 療 が で き な っ た 。 [ 平 安 ア レ ]

\*イスタンブル本, タシユケント本は Qadāqī をチャガタイの第7子の欄から消しておきながら、ここの箇所を訂正するのを忘れていた。註39参照。

- 20) 『モンゴル時代の「知」の東西』 p. 942.
- 21) *Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Paris, suppl. persan209, f. 175b, MS: Paris, suppl. persan1113, f. 132a.  
 [Ūktāi 窩闊台皇帝の第6子 Qadān ugūl 合丹大王の子] ④ *Yayah* 爺爺: かれも海都の隨從であつた。2人の息子をもうけていた。(1) *Urūk-Tīmūr* 月魯帖木兒 (2) *Īs-Tīmūr*。この月魯帖木兒は [を], 海都を [は] *Ḥurāsān* の境界に派遣していた。ナウルーズが逃亡してかの方面に [あつた] 時分, 月魯帖木兒と一緒にいて, 自身の娘をかれに與えた…11人の息子をもうけていた。Kūrasibah 曲列失伯・Tūqlūq-Būqā・Qūtlūq-Ḥwāgah・Būlūq-Tīmūr・Abāci・Kūcah-Tīmūr・Ġin-Tīmūr・Ġin-Būlād・Algūn・Muḥammad・'Alī…
- Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Istanbul, f. 136b-137a, f. 138b, MS: Taškent, f. 108a-108b, f. 110a.  
 [Ūktāi 窩闊台皇帝の第6子 Qadān ugūl 合丹大王の子] ④ *Yayah* 爺爺: かれも海都の隨從であつた。2人の息子をもうけていた。(1) *Urūk-Tīmūr* 月魯帖木兒 (2) *Īsi-Tīmūr*…  
 ⑦ *Āgīqi* 阿只吉: 月魯帖木兒という名の1人の息子をもうけた。この月魯帖木兒を, 海都 *Ḥurāsān* の境界に派遣していた。臣僚 (= 官人) のナウルーズが逃亡して河の向こう側に去つた時分, 月魯帖木兒と一緒にいて, 自身の娘をかれに與えた…11人の息子をもうけていた。順序は以下のとおり。Kūrasbah・Tūqlūq-Būqā・Qūtlūq-Ḥwāgah・Qutlug-Tīmūr・Ābāci・Kūcah-Tīmūr・Ġib-Tīmūr・Ġin-Būlād・Algūn・Muḥammad・'Alī\*…
- ※系圖では, 阿只吉の子は月魯となっており, 11人の息子は古い情報すなわち爺爺—月魯帖木兒—に繋げたままである。
- Šu'ab-i Panggānah*, f. 127a, *Mu'izz al-Ansāb*, MS: Paris, f. 42b.  
 Činggiz hān/Čingiz hān—Ūkdai hān/Ūkdai Qāān—Qadāqān ugūl/Qadān ugūl—*Yāyah/Yayah*—*Urūk-Tīmūr/Urūk-Tīmūr*  
 阿只吉と月魯帖木兒の父子の情報は記入されていない。誤情報だと認識したからだろう。
- Tāriḥ-i Ūljāitū Sultān*, MS: Istanbul, f. 231a, MS: Paris, f. 138b, *Tāriḥ-i Ūljāitū*, p. 217, *Die Chronik des Qāšāni über den Ilchan Ūljāitū (1304-1316)*, p. 182, text, p. 215.  
 Qadānの子 *Yayah*の子 *Ūruk-Tīmūr*の息子 Qūtlūq-ḥwāgah
- 22) 註39参照。
- 23) 『元史』卷四「世祖本紀一」“中統元年春三月戊辰, 車駕至開平。親王合丹・阿只吉率西道諸王, 塔察兒・也先哥・忽刺忽兒・爪都率東道諸王, 皆來會, 與諸大臣勸進”。
- 24) 『元史』卷六十「地理志三」, 卷六十三「地理志六」, 『定襄金石攷』卷三「故邢氏節行之銘」, 『秋澗先生大全文集』卷八十一「中堂事記・中」[中統二年夏六月二日壬辰], 『滋溪文稿』卷二十三「元故參知政事王憲穆公行狀」, 『大元馬政記』(『廣倉學叢書』甲類第一集) 14b-15a「刷馬」, 『大元聖政國朝典章』卷五十二「刑部十四・詐僞」《詐》【詐寫大王令旨】、卷四十六「刑部八・諸賊」《取受》【替閑官員犯賊】、卷九「吏部三・官制」《投下》【投下不得勾職官】、卷二十七「戸部十三・錢債」《幹脫錢》【幹脫錢爲民者倚閣】、『モンゴル時代の「知」の東西』 p. 665, p. 726, p. 807.
- 25) 『モンゴル時代の「知」の東西』 p. 739.
- 26) 杉山正明「ふたつのチャガタイ家」。ちなみに、『ヴァッサーフ史』第4巻には、『オルジェイトゥ史』のA. H. 704の大使節團に對應する記事【海都の勾當の結末とかれの子察八兒大王への代替わり】とは別に, オルジェイトゥ・スルタンの即位の祝賀と大蒙古國全體の講和のための大使節團の記事【高貴なる名號, 成吉思汗の後裔間の歲賜に關する *tungqal jarliq* 宣諭聖旨を將ち來る皇帝の使臣の到着】があり, 後者の大使節團は“13の投下 (= 大枝諸王) を

- 伴った皇帝<sup>カアン</sup>の使臣たち、400 匹の<sup>ウラク</sup>舗馬を擁する<sup>カイドゥ</sup>海都の(子)察八兒と<sup>チャバール</sup>土哇、<sup>ドゥア</sup>火尼赤と  
 TRSW>Tersü 帖兒速、<sup>テルス</sup>出伯と<sup>チュベイ</sup>哈班、<sup>カバン</sup>忽都魯火者(『高貴系譜』によると、<sup>クトルクホージヤ</sup>チャガタイ家ム  
 バーラク・シャーの孫で、<sup>シャイフ</sup>シャイフ・テムルの兄弟もしくは子/従兄弟。オゴデイ家のオル  
 グ・テムルの子の可能性もある。註 21 参照) とその他諸大王たちの使臣たち” から構成され  
 たという。Ta'rih-i Vaṣṣāf, Bombay, pp. 449-455, pp. 475-477, MS: Istanbul, f. 92b-101a, f.  
 134b-137b, Mu'izz al-Ansāb, MS: Paris, f. 34b-35a, MS: London, BL, Or. 467, f. 35b, MS: f.  
 36b-37a, MS: India, Maurana Azad Library, No. 41/42, f. 36b f. 37a.
- 27) Tāriḥ-i Ūljāitū Sultān, MS: Istanbul, f. 198b. l. 2-f. 201. l. 16, MS: Paris, f. 96a. l. 9-f. 100a. l. 19,  
 Tāriḥ-i Ūljāitū, p. 144. l. 6-p. 150. l. 12, Die Chronik des Qāshānī über den Ilchan Ōljāitū  
 (1304-1316), p. 126. l. 27-p. 132. l. 29, pp. 230-231, text, p. 142. l. 16-p. 149. l. 20, Dail-i Ğāmi'  
 al-Tavāriḥ MS: Paris, f. 469b. l. 14-l. 21, f. 482b. l. 18-Istanbul, f. 25a. l. 11-19, f. 37b-38a.
- 28) Ğāmi' al-Tavāriḥ, MS: Rampur, p. 25, MS: St. Petersburg, f. 103a, MS: Paris, f. 201b-202a, f.  
 103a, MS: Istanbul, f. 158b-159a, f. 162b, MS: Taškent, f. 131a-131b.

Tüqūqān/Tüqān 脱歡の第 2 子 Munkā Timūr<Möngke-Temür<sup>モンケテムル</sup> 忙哥帖木兒: この忙哥帖  
 木兒には hātūn<qatun 后妃たち・妻妾たちがいており、より大なる三人の後妃の名が判  
 明している。(第一は) Qūnqūrāt<sup>コンギラト</sup> 弘吉剌族の Ūlgāi<Ōljei<sup>オルジュイ</sup> 完者、(第二は) Ūšin<sup>フウシン</sup> 許兀慎  
 族の Sultān<sup>スルタン</sup> 算灘妃子、(第三は) □□族の Qūtū<sup>クトウイ</sup> 忽推妃子。10 人の息子をもうけている。  
 詳細・順序は以下の通り。① Alqūi / Alqū 阿魯灰 ② Ayāci 阿牙赤/Abāci 阿八赤 ③  
 Tūdākān ④ Bürlük/Bürkük ⑤ Tūqtuā / Tūqtāi 脱脱 ⑥ Sarāi-Būqā ⑦ Hūlāqāi ⑧  
 Qadān 哈丹 ⑨ Qūdūqān ⑩ Tūgrilgah<sup>トクリルチャ</sup> 脱憐察: [息子がひとりいる。かれの名は  
 Ūzbāk<sup>ウズベク</sup> 月即伯/息子がひとりいる。Ūzbik]。

※イスタンブル本の系圖は、<sup>モンケテムル</sup>忙哥帖木兒の子供たちを誤って Tüqān の第一子 Tāribū に繋  
 いでいる。

Šu'ab-i Panggānah, f. 112b-f. 113a.

Činggiz hān—Ĝūci hān—Bātū—Tüqūqān—Münkkā Timūr—Tūgrilcāh—  
 Ūzbāk

Mu'izz al-Ansāb, MS: Paris, f. 20b-f. 22a.

Čingiz hān—Ĝūci hān—Bātū—Tüqān—Munkā Timūr—Tūgrilcāh—Ūzbak  
 hān 月即伯汗—Ĝānibik 札尼別—Birdibik

- 29) Tāriḥ-i Ūljāitū Sultān, MS: Istanbul, f. 174b, MS: Paris, f. 59b, Tāriḥ-i Ūljāitū, p. 89, Die Chronik  
 des Qāshānī über den Ilchan Ōljāitū (1304-1316), p. 82, text, p. 87.

[A. H. 709 年] 12 月 29 日 (1310 年 5 月 30 日) に、<sup>ジュチウルス</sup>朮赤國の君主 Tūqtā<sup>トクタ</sup> 脱脱<sup>エルチ</sup>の使臣たち  
 が a'ulja 拜見し、賞賜の榮譽に浴した。

とある。

- 30) Ğāmi' al-Tavāriḥ, MS: Rampur, pp. 19-21, MS: Paris, f. 198a-199b, MS: Istanbul, f. 156a-157a,  
 f. 162a, MS: Taškent, f. 128b-129b

目下、Ūrdah<sup>オルダ</sup> 幹兒答<sup>ウルス</sup>の國の君主である火你赤の子伯顏は、かれの従兄弟の Kūpluk<sup>コニチ</sup> がかれ  
 に反抗していて、かれをおそれるため、[拔都/かれ]の國の君主たる Tūqtā<sup>ウルス</sup> 脱脱の邦  
 土の疆域の先にきて、qūirtāi<sup>カリク</sup> 聚會の名目でかれのもとに前去していた。のちほどその物  
 語の詳細が述べられるはずの如くに。

[Ĝūci hān の第一子<sup>オルダ</sup> 幹兒答の第一子<sup>サルタクタイ</sup> Sartāqtāi 撒里答台の子] 火你赤<sup>コニチ</sup> の第一子<sup>バヤン</sup> 伯顏: …現在、  
 伯顏は自身の父火你赤<sup>ウルス</sup>の座次に坐して、體例に依ってかれの父の國を治めている。イス

ラームの君主——[神ヨ] 彼ノ王國ヲ永遠タラシメタマエ (=ガザン) に友情を抱き、示したいと願っており、使臣たちを絶え間なく派遣している。これより前、**Qütüqū** の子 **Tīmūr-Būqā** の子 **Kūbluk** が「在前は、俺の父が國を治め着有來。相續せ教め者」と主張して蜂起し、海都と土哇から軍勢を得て、突如伯顔を襲ってきた。伯顔は敗走し、拔都の繼承者たる Tūqtā 脱脱の邦土の疆域に去き下馬した…第二子 Bāgqirtāi : …第三子 : Čagān-Būqā…第四子 : **Māqūdāi**…

*Šu'ab-i Panggānah*, f. 108b.

Činggiz hān 成吉思汗——Gūci hān 朮赤汗——Ūrdah 斡兒答——Sarātaqtai 撒里答  
——**Qūniči** 火你赤\*——**Bāyān** · Bāsīrattay · Čagān-Būqā · **Mātūdāi**

\*この火你赤は皇帝の“tūruq < Mon. turuq 倚仗”と呼ばれている。

*Mu'izz al-Ansāb*, MS : Paris, f. 18a-19b.

Čingiz hān——Gūci hān——Ūrdah——Sartāqtai——Qūniči\*——**Bāyān** · Čagān-Būqā · Bātūdāi · **Bāšqirt**

\*この火你赤は長期間、斡兒答の國の支配者であった。車での移動に、どんな馬でも引張れないほど肥えていた。日夜、衛兵たちが、かれを死んでしまうような寝方をしないように、脂肪が氣道を塞がないように監視していたが、結局は、ああ御救いください！眠りこみ、かれの喉の脂肪が隆起して身罷った。

なお、MWMKQTAY は Mātūdāi/Māqūdāi に對する蔑稱だろう。

31) *Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS : Rampur, pp. 23-24.

[Gūci hān の第一子] 斡兒答の第 6 子 **Qütüqū** : かれには 2 人の大后がいたのであった。ひとりとは Sülüqān 后 という名 [で 族の出身], もうひとりの名は Tūbārgin で 欽察たちの部族の出身。かのじよたちから 2 人の息子をもうけた。Tīmūr-Būqā, Ūlqūtū. **Qütüqū** の第一子 **Tīmūr-Būqā** : かれには 4 人の大后がいたのであった。第一は 弘吉剌族の Tisūr 官人の娘 **Kūkgin**…上述のこれらの后妃たちから 6 人の子をもうけている。詳細と順序は以下のとおり。Kūluk : Kūkgin から生まれた。Tūqā-Tīmūr, Ġāngqūt, Būqā-Tīmūr, Sāsī, **Ūsānān** : かれも Kūkgin から生まれた。斡兒答の第 7 子 **Hūlāgū** 旭烈兀 : この Hūlāgū は Tankqūt 西夏族の妻妾から、彼女の名は Armūk Ġāci < egeci 姐姐, 髪が地面に届かんばかりにひじょうに長かった。かれには子女たちが無かった。平安アレ。

*Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS : Paris, f. 200b, MS : Istanbul, f. 158a, f. 162a, MS : Taškent, f. 130b.

[Gūci hān の第一子] 斡兒答の第 6 子 **Qütüqū** : かれも子女たちがいたのかいなかったのか明らかでない。斡兒答の第 7 子 **Hūlāgū** 旭烈兀 : かれには 2 人の大后がいたのであった。ひとりとは Sülüqū/Sülüqān 后 という名 [で 族の出身], もうひとりの名は Qūtārgin/Tūrbārgin で 欽察たちの部族の出身。かのじよたちから 2 人の息子をもうけた。[ひとりとは] **Tīmūr-Būqā**, [もうひとりとは] Ūlqūtū [という名。神ヨ平安アレカシ]。旭烈兀の [息子の／第一子] **Tīmūr-Būqā** : かれには 4 人の大后がいたのであった。第一は 弘吉剌族の Tisū 官人の娘 **Kūkgin**…上述のこれらの后妃たちは 6 人の子をもうけている。[順序は以下のとおり] **Kūluk/Kūbluk** : Kūkgin から生まれた。Tūqā-Tīmūr, Ġāngqūn/Ġāngqūt, Būqā-Tīmūr, Sāsī, **Ūsānān** : かれも Kūkgin から生まれた。旭烈兀の第二子 Ūlqūtū : …

\*系圖の情報も同じ。

*Šu'ab-i Panggānah*, f. 108b, *Mu'izz al-Ansāb*, MS : Paris, f. 18b-19b.

Činggiz hān/Čingiz hān—Gūci hān—Ūrdah—**Hūlāgū/Hūlāū**

Šu'ab-i Paṅgānah, f. 111b, Mu'izz al-Ansāb, MS: Paris, f. 20a.

Činggiz hān/Čingiz hān—Gūci hān—Ūrdah—**Qūtūqū—Timūr-Būqā—**  
Kūpālāk/**Kūbluk**\* · Tūqā-Timūr · Ġāngqūn/Ġāngqūt · Būqā-Timūr · Sāsī · **Ūsānān/**  
**Ūsānān**

\*この Kūpālāk は 3 人の子供をもうけたといわれている。かれの子供たちが亡くなってしまふと、かれらの名前は短期間の経過のうちに轉じてしまった。かれらの名前が確かではなく、記録されなかったために。これは、かれらの使臣たちの口述ではないが、息子たちがあったことがわかるように、その正方形の枠を描いておこう（われらは）／この Kūbluk は適当な息子たちが次々に身罷って、短期間に轉じてしまった。かれらの名前は確かではなく記録されなかったために。

- 32) *Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Rampur, p. 25, MS: Paris, f. 201b-202a, MS: St. Petersburg, f. 103a, MS: Istanbul, f. 159a, f. 162b, MS: Taškent, f. 131b.

**Tūqtuā /Tūqtāi** 脱脱: **Mangū hān/Manggū hān/Mungū qān** 蒙哥皇帝の姉妹 **Kilmīs**  
怯里迷失 (可里美思) **aqā** 阿哈—**Salgīdāi** 撒兀帶 駙馬の妻であった—の娘 完者 妃子  
より生まれた。現在、**兀赤**の君主はかれである。二人の後妃をもち、ひとり  
は **Būlgān** 不魯罕, [もう一人の弘吉剌族の **Tūkūlčah** からはひとりの息子をもうけている。  
**Yābūš** という名／そのうちもう一人は弘吉剌族の **Tūkūlčah** で三人の息子がいる。詳細は  
以下の通り。**Yābūš/Yābarūš/, Ankiyar/Īl-basār, Tūkil-Būqā]**

Šu'ab-i Paṅgānah, f. 113a.

Činggiz hān—Gūci hān—Bātū—Tūqūqān—Mūnkā Timūr—**Tūqtuā—**  
**Tūkal-Būqā · Īl-Bāsār · Tūkil-Būqā**

Mu'izz al-Ansāb, MS: Paris, f. 21b-f. 22a.

Čingiz hān—Gūci hān—Bātū—Tūqān—Mūnkā Timūr—**Tūqtuā—Tūkal-**  
**Būqā · Bātū-taš? · Īl-Bāsār**

- 33) *Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Rampur, p. 49, MS: St. Petersburg, PNS46, f. 109b.

**察合台の第 2 子 Mūā-tūkān : …Mūā-tūkān の第 2 子 Īsūn-tūā** 也孫禿阿: この也孫禿阿  
には 3 人の息子がいたのである。詳細と順序は以下の通り。① Mūmin: かれの名は yayah  
爺爺 ② **Barāq** 八剌: かれには 4 人の息子がいた。Bik-Timur 別帖木兒, **Dūā** 都哇,  
Būzmah 卜思巴, Ūlādāy /Ūlādāi 兀刺解 ③ Basār 八撒兒

*Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Paris, BnF, suppl. persan209, f. 210b-211a.

**察合台の第 2 子 Mūā-tūkān : …Mūā-tūkān の第 3 子 Īsū-tūā**: かれには 3 人の息子がい  
たのである。詳細と順序は以下の通り。第一は Mūmin. かれには 2 人の息子がいる。一  
番目の名は yayah. かれの息子の名は Bilgah-Timūr. 二番目の名は Urūk. 第二は **Barāq**.  
かれには 5 人の息子がいた。Bik-Timur, **Dūā**, Tūqbah, Ūlādāi, Būzmah. 第三は  
Basār: 阿八合汗が, Qarāūnās の排除のため哈烈に前赴した歳に, 阿合馬が Ĥurāsān から  
逃げて来た時分に, 此處に歸附してきた。臣僚たちがかれを殺した。

*Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Istanbul, f. 169a, f. 171a, MS: Taškent, f. 140b, f. 141b, MS: London, BL,  
Or. Add. 16688, f. 9a-12a.

**察合台の第 1 子 Mūā-tūkān : …Mūā-tūkān の第 3 子 Yīsūn-tūā**: この Yīsūn-tūā には 3  
人の息子がいたのである。詳細と順序は以下の通り。① Mūmin: かれには 2 人の息子が  
いる。順序は以下の通り。Yayah で息子 1 人をもうけておりかれの名は Bilkā-Timūr であ

る。Ūrūk。② **Barāq**：かれには5人の息子がいた。順序は以下の通り。Tuqtār/Tuqtāi, Ūladāi, Būzmah, **Dūā\***, Bik-Timur ③ Basār：阿八合汗が, Qarāūnās の排除のため<sup>ヘラート</sup> 哈烈に前去した歳に, [阿合馬が<sup>アバカカン</sup> Hurāsān から逃げた時分に], 此處に歸附してきた。[臣僚たちがかれを殺した]。

**Barāq** には息子たち, 孫たちがたくさんいる。本書の執筆後に判明したので, かれらの名は, この箇所では不可能だった。このため言及しなかった。かれの分枝については, 究明されねばならないため, 既述のままである。

※系圖には Dūā の子として Qutlg-hvāgah, Kahan-Būqā, **Kūṅgāk**<sup>コンチェク</sup> 寬闊, Timūr-Būqā, **Īsin-Būqā**<sup>エセン</sup> 也先不花, Qubilāi, **Kabik**<sup>ケベク</sup> 怯伯, **Abūkan**<sup>エフゲン</sup> 也不干, **Īt-qūli**, Manklik-Timūr が擧げられる。

Šu'ab-i Paṅgānah, MS: Istanbul, f. 119b.

Ġinkiz hān—Ġādāi hān—Mūvā-tūkān < Mō'e-tūgen—Īsūn-tūā—**Barāq**—**Dūā\***—Qutlg-hvāgah · Ġāgān-Būqā · **Kūṅgāk** · Timūr-Būqā · **Īsin-Būqā** · Qubilāi · **Kūpāk** · **Abūkan** · **Īt-qūli** · Minklik-Timūr

※この Tūqā は現在, かの<sup>ウルス</sup> 國の君主, 父 **Barāq** の座次にある。

Mu'izz al-Ansāb, MS: Paris, f. 31a-32a.

Ġinkiz hān—Ġāgātāi hān—Mī-tūkān—Īsūn-tūā—**Dūā hān**<sup>\*1</sup>—**Īsin-Būqā hān** · Tarmahšīrin · Tuḡān-šāh · Bahrām · Rustam · Īlgikdāi · Šukulgī hvāgah · **Īt-qūli** · Ġāgān-Būqā · **Ūbūkān** · Īl hvāgah · Īkirdāi? · Īmir hvāgah · Qutlug-hvāgah · Qātluq · Īsulq? · **Kūṅgāk**<sup>コンチェク</sup> 寬闊<sup>\*2</sup> · Sūz'ātū · Daurat-Timūr · Huma'un · **Kabak hān**<sup>チヤガタイ</sup> 怯伯<sup>ウルス</sup><sup>\*3</sup>

※1 Dūā hān は 690A. H. (1291年1月4日~12月23日) に察合台の國の君主となった。706A. H. (1306年7月13日~1307年7月2日) に海東青になった。16年間, 支配した。

※2 Dūā hān が亡くなった 706A. H にかれの臣僚たちが<sup>コンチェク</sup> 寬闊 を Bārs-kül < Bars-Köl より連れてきて, Almāliq < Almalīq の上部の Sitkūl < Sūt-Köl において, その父の王座に坐らせたが, かれもまた1年半後, İldüz の sarāy にて身罷った。

※3 Kabak hān は Nālīqū を顛覆に至らしめた後, pādšāh 君主となった。その兄の **Īsin-Būqā** は **Qāān** の根前にいた。かれの召喚に遣わし, 來到すると, 兄の到着まで在って一年統治していた王權を兄に, また兄が身罷ると, かれが支配者となった。かれの政府の時代に, Mā-warā' al-nahr は繁榮した。かれは 721A. H. (1321年1月31日~1322年1月19日) に生來・解放の病いを發し, ここに逝った。かれの王權の期間は8年より多くはなかったのである。

- 34) 『元史』卷二十四「仁宗本紀一」[皇慶元年二月]“庚午(四日=1312年3月12日), 西北諸王也先<sup>エセン</sup>不花<sup>ブカ</sup>遣使貢珠寶・皮幣・馬駝, 賜鈔一萬三千六百錠”, “[三月]甲寅(十八日=1312年4月25日), 西北諸王也先<sup>エセン</sup>不花<sup>ブカ</sup>等遣使以橐駝, 方物入貢”, “[皇慶二年二月(1313年2月26日~3月27日)]壬午, 西北諸王也先<sup>エセン</sup>不花<sup>ブカ</sup>進馬・駝・璞玉”とあるから, それ以降の話ということになる。次註参照。
- 35) *Tārīḥ-i Ūljāitū Sultān*, MS: Istanbul, f. 211, MS: Paris, f. 115a, *Tārīḥ-i Ūljāitū*, pp. 174-175, *Die Chronik des Qāšāni über den Ilchan Ūljāitū* pp. 151-152., text, p. 175. に,

ババは, 那ご<sup>モンゴル</sup>蒙古曆の長年 < 卯年に相當する A. H. 715年6月(1315年9月2日~30日)に, 海都<sup>カイドゥ</sup>の隨從・親類に屬するほかの諸王たち數名ともども<sup>オルジェイトウスルタン</sup>完者都算端の御前に訴え出て「卑劣・恐怖なる埋伏から準備され來<sup>たところの</sup>的休息・安靜の避難所に至<sup>て</sup>つ着, 恐怖・恐

れ・恫喝・威嚇から安全な命運<sup>なつた</sup>と了<sup>ババ</sup>とて看做した。八八の案件の故に、完者都算端<sup>オルジェイトゥスルタン</sup>と朮赤汗<sup>ジョチカン</sup>の國<sup>ウルス</sup>の君主たる烏即別<sup>ウズベク</sup>大王<sup>テムルカアン</sup>の間にありとあらゆる疑心暗鬼<sup>ジョチカン</sup>が現れ、何度も使臣たちが否定・抗辨の問責のうちに往來した。AYSNBWGA 也先不花<sup>エセンフカオグル</sup>大王はこの状況を聞くと、好機を捉え煽動・攪亂をなした。烏即別が煽動・攪亂のうちにかれと同盟・融和することを願い、烏即別に「鐵穆耳皇帝は、朮赤汗<sup>ウズベク</sup>の國<sup>カアン</sup>の汗位に相應しく無い。欽察帽<sup>キョチヤクバシユ</sup>の統治権を muqaddar 規定<sup>もの</sup>的に委任せんことを討求す」との信書を送った。月即伯はかれの詭計・詐欺によって鐵穆耳皇帝<sup>テムルカアン</sup>に對し反逆者・敵となった。

とほぼ同じ話が載るが、ここは成宗テムルでは時期が合わない。カーシャーニーの編纂ミス——かれが大元ウルスの歴史に詳しくなかったことの證左——だろう。これは、『清容居士集』卷三十四「拜住元帥出使事實」“皇慶二年（1313）、仁宗以金印賜丞相<sup>ホロト</sup>孛羅<sup>ハルバン</sup>，且俾住哈兒班答王所議事。至中途，遇也先不花王，疑有間諜，執以問…”，『道園學古錄』卷二十三／『國朝文類』卷二十六虞集「句容郡王世績碑」“延祐元年（1314）、也先不花等諸王，復叛”の狀況と對應する。

- 36) 『元史』卷二十五「仁宗本紀二」“〔延祐元年夏四月〕壬辰（九日=1314年5月23日），諸王<sup>トウ</sup>脫斡<sup>トア</sup>，以月思別襲位”。
- 37) モンケの死後に生じたフレグ・ウルスとジョチ・ウルスの争いについては、『モンゴル時代の「知」の東西』pp. 701-709 参照。
- 38) *Tārīḥ-i Ūljāitū Sultān*, MS: Istanbul, f. 159b, MS: Paris, f. 36b-37a, *Tārīḥ-i Ūljāitū*, pp. 53-54, *Die Chronik des Qāšāni über den Ilchan Ölgāitū* p. 57, text, p. 53. *Dail-i Ğāmi' al-Tavārīḥ*, MS: Paris, f. 450a, MS: Istanbul, f. 7b.

qoyn yıl 未年<午年の biryigirminc ay 十一月十九日（1306年12月25日）に相當する 6月18日の日曜日（1306年12月25日）…「未年<午年 sākişinc ay 八月に相當する A. H. 706に、Dua<sup>ドゥア</sup> 都瓦は腦炎・白喉（=ジフテリア）の病氣のため逝去した。自身の行いの應報・諸々の行爲の清算に至った」との都瓦<sup>ドゥワ</sup>の死の通知に對し、「虚しき都瓦の最期の餞/件」に、寶石類を şadaqa 喜捨した。かれの死後、かれの政府の臣僚たち・柱石たちは、かれの息子の 寬闊<sup>コンケク</sup>を Bars-kül<Bars-Köl 八兒思闊より連れてきて、Almalıq 阿里麻里/阿力麻里地方の上部の Sitkül<Süt-Köl 乳湖において、察合台<sup>チャガタイ</sup>の國<sup>ウルス</sup>の王座に即位させたが、かれもまた1年半後、törtünc ay 四月の月に、İldüz<sup>イルドゥズ</sup>の sarây<sup>サライ</sup>の qišlämişi 住冬において、出發の太鼓を打倒してすぐに父の踪跡を辿った。

『元史』卷二十二「武宗本紀一」“〔至大元年秋七月壬申（16日=1308年8月2日）〕遣塔察兒<sup>タガチャル</sup>等九人使諸王<sup>コンチェク</sup> 寬闊<sup>ウルグ</sup>，遣月魯<sup>トルフカ</sup>等十二人使諸王脫斡<sup>トクトア</sup>…癸酉（8月3日）遣脫里不花<sup>トルフカ</sup>等二十人使諸王合兒班答<sup>ハルバンダ</sup>（=オルジェイトウ・スルタン）”，“〔九月丙辰朔（9月15日）〕“命雪尼台<sup>スニタイ</sup>・鐵木察<sup>テムル</sup>使薛迷思干<sup>セミスセント</sup>部”，“辛酉（9月21日），遣人使諸王察八兒<sup>チャバル</sup> 寬闊<sup>コンチェク</sup>”，“癸亥（9月23日），萬戶也列門<sup>イェレメン</sup>・合散<sup>ハサン</sup>來自薛迷思干<sup>セミスセント</sup>等城，進呈太祖時所造『戸口青冊』，賜銀鈔幣帛有差”，〔庚辰（10月9日），中書省臣〕“又言「薛迷思干<sup>セミスセント</sup>・塔刺思<sup>タラス</sup>・塔失玄<sup>タシユセント</sup>等城，三年民賦以輸縣官。今因雪尼台<sup>スニタイ</sup>・鐵木察<sup>テムル</sup>・察<sup>チャク</sup>往彼，宜令以二年之賦與寬闊<sup>コンチェク</sup>，給與元輸之人，以一年者上進」並從之”。

- 39) *Ğāmi' al-Tavārīḥ*, MS: Rampur, pp. 48-52, MS: MS: St. Petersburg, f. 110b-111a.  
察合台<sup>チャガタイ</sup>の第1子 Mūjī-yayah 爺爺<sup>チャガタイ</sup>：…察合台<sup>チャガタイ</sup>の第2子 Mūā-tūkān：…Mūā-tūkān の第3子 Būrī：…Būrī には2人の息子がいる。第1は Abišqah 阿必失哈<sup>アビシカ</sup>：この阿必失哈は子息をもたなかった…第2は Aġīqi 阿只吉<sup>アジキ</sup>：この阿只吉は Qubilai-Qāan 忽必烈皇帝<sup>クベライカアン</sup>の侍侯であった。現在、Timūr-Qāan 鐵穆耳皇帝<sup>テムル</sup>の根前に居る。非常に老齡で、彼處で侍侯する諸王全てのなかで最も威信があり、尊敬すべきかつ確固たる重鎮である。かれには3人の息

子がいる。① **Ūruk** ② **Ūruk-Timūr** ③ **Aršil-Türkân**。まさしく孫たちももっており、侍侯している…察合台の第3子 **Yisū-Münkkā** 也速蒙哥…察合台の第4子 **BLKŠY** : …察合台の第5子 **Bāigū** 拜住…察合台の第6子 **Bāidār** : …察合台の第7子 **Qadaqī** < **Qadaqī/Qadagi** : かれの母は, **Tükân** < **Tügen** 后妃であって, この **Qadagi** は5人の息子をもっている。以下の順である。① **Bābā** 八八 ② **Tūqū** 脱忽 ③ **Nāliqū/Tāliqū**, ④ **Būqā-Timūr** 不花帖木兒 ⑤ **Būqā** 不花 : しばらく, 察合台の國の君主であった。かれが亡くなると **Balāq** の息子 **Dūā** に與えられた。察合台の第8子 : **Sārbān**

*Ġāmi'al-Tavāriḥ*, MS: Paris, f. 210a- 211a.

察合台の第1子 **Mūji-yayah** : …察合台の第2子 **Mūā-tükān** : …**Mūā-tükān** の第2子 **Būrī** : …**Būrī** は5人の息子をもっている。第1は **Abišqah** : この阿必失哈は子息をもたなかった…第2は **Āgīqī** 阿只吉 : この阿只吉は **Qubilāi-hān** 忽必烈汗の侍侯であった。現在, **Timūr-Qāan** 鐵穆耳皇帝の根前に居る。非常に老齡で, かれは彼處にいる諸王全てのなかで最も威信があり, 尊敬すべきかつ確固たる重鎮である。かれには3人の息子がいる。① **Ūruk** ② **Ūruk-Timūr** ③ **Aršil-Türkân**。まさしく子女たちももっており, 侍侯している…第3は **Qadāngī Sāgān** < **Qadagi/Qadaqai-Sečen** : かれは4人の息子をもっている。**Nāliqū** : かれは3人の息子をもっている。**Timūr**, **Ūradāi**, **Tümān**。次に **Būqū** : かれは2人の息子をもっている。**Ḍū al-Qarnain**, **'Alī**。次に **Būqā-Timūr** : …次に **Būqā** : …第4は **Aḥmad**…第5は **Abūkān**…察合台の第3子 : **BLKŠY** : …察合台の第4子 **Sārbān** 撒里蠻 : …察合台の第5子 **Yisū-Mūnggā** 也速蒙哥 : …察合台の第6子 **Bāidār**…察合台の第7子 **Qadaqī** : かれの母は, **Tükān** < **Tügen** 后妃であって, この **Qadagi** は5人の息子をもっている。**Bābā**, **Tūqū**, **Nāliqūā**, **Būqā-Timūr**, **Būqā**。察合台の第8子 : **Bāigū**,

*Ġāmi'al-Tavāriḥ*, MS: Istanbul, f. 168a-171b, MS: London, BL, Or. Add. 16688, f. 9a-12a.

察合台の第1子 **Mūā-tükān** : …**Mūā-tükān** の第2子 **Būrī/Fūrī** : …**Būrī** は5人の息子をもっている。詳細・順序は以下のとおり。① **Qadaqī Sāgān/Qadaqī Sīgān** < **Qadagi/Qadaqai-Sečen**\*1 : かれは4人の息子がいる。以下の順である。① **Tāliqū/Faiḥū**\*2 : 3人の息子をもっている。**Timūr/Ūruk-Timūr**, **Ūradāi**, **Tümān** ② **Būqū** : 2人の息子をもっている。**Ḍū al-Qarnain**, **'Alī**。③ **Būqā-Timūr** ④ **Būqā** ⑤ **Aḥmad** : …⑥ **Āgīqī** 阿只吉 : かれには2人の息子がいる。(1) **Ūruk** : 2人の息子をもつ。**Pūl-Būqā**, **Ġāzān**。[(2) **Aršil-Türkân**] ④ **Abūkān** 也不干 : …⑤ **Abišqah** : かれには息子が1人あり, [その名は **Ūruk/Ūruk** という名]。ところで, この阿只吉は **Qubilāi-Qān** 忽必烈皇帝の侍侯であった。現在, **Timūr-Qān** 鐵穆耳皇帝の根前に居る。非常に老齡で, かれは彼處にいる諸王全てのなかで最も威信があり, 尊敬すべきかつ確固たる重鎮である。いっぽう **Abišqah** は…察合台の第2子 **Mūji-yiyah** 爺爺 : …察合台の第3子 **BLKSY** : …察合台の第4子 **Sārbān/Sārmān** 撒里蠻 : …察合台の第5子 **Yisū-Mūngkā/Yisū-Munkā** 也速蒙哥 : …察合台の第6子 **Bāidār/Bāidar**。

\*1 イスタンブル本系圖の注記には, “この **Qadagi/Qadaqai-Sečen** の母は弘吉剌族の **Yisūkū** 妃だったのである。かれに **Sečen** と **Manggū-Qān** が名付けた。baqšī 僧たちの慣習によって **parāšidah** ざんばら髪にしていた / **tarāšidah** 剃髪していた。**Manggū-Qān** と共に漢兒の田地に軍を以て前去し, 道中亡くなった。かれの子女たちは現在 **Dūā** の根前にいる” とある。なお, 系圖では **Qadagi/Qadaqai-Sečen** の子供たちに, 誤って **Būqū** の子の **Zū al-Qarnain** と **'Alī** が加えられている。

- ※2 イスタンブル本系圖の注記には, “この Tāliqū は Kirmān の Sulṭān Quṭb al-Dīn の娘 Tūrken という小名の<sup>もの</sup>的より生まれた。Ḥaṣr-i barš 一切れの限定相続人? と呼ばれている” とある。

Šu'ab-i Panğānah, MS: Istanbul, f. 118.

Ġinkkiz ḥān—Ġādāi ḥān—Mūvā-tūkān—Būri<Buri—**Qādāqī Sāğān**<Qadaqi/Qadaqai-šečen<sup>\*1</sup>—**Nāliqū**<**Naliqū**<sup>\*2</sup>—□□—Timūr·Ūrūqūdāi·Tūmān

- ※1 この Qadaqi/Qadaqai-Sečen の母は弘吉剌族<sup>コンギラト</sup>の Yisū 妃だったのである。かれは Mangū-Qān によって Sečen と命名された。baqši 僧たちの慣習によって剃髪していた。Mangū-Qān と共に漢兒<sup>キタイ</sup>の田地に軍を以て前去し, 道中亡くなった。かれの子女たちは現在 Dūā の根前にいる。

- ※2 この Nāliqū は Kirmān の Sulṭān Quṭb al-Dīn の娘 Tūrken という小名の<sup>もの</sup>的より生まれた。ḥafir-i turš 憂鬱な守衛? と呼ばれている。

Ġinkkiz ḥān—Ġādāi ḥān—Mūvā-tūkān—Būri—**Qādāqī Sāğān**—Tūqū—**'Alī·Dū al-Qarnain**

- ※1 この Tūqū も上述のこの Tūrken から生まれた。弓術に傑出していて自身の時代であったが, 18歳で亡くなった。

Ġinkkiz ḥān—Ġādāi ḥān—Mūvā-tūkān—Būri—**Ağiqī**—Arsil-Türkān·**Ūrūk**

Ġinkkiz ḥān—Ġādāi ḥān—Mūvā-tūkān—Būri—**Ağiqī**—**Ūrūk**—Yil-Būqā·Qāzān

Ġinkkiz ḥān—Ġādāi ḥān—Mūvā-tūkān—Būri—Abišqah—**Ūrūk**

Mu'izz al-Ansāb, MS: Paris, f. 29b-30a.

Ġinkiz ḥān—Ġāğatāi ḥān—Mī-tūkān—Būri—**Qādāqī Sāğān**<sup>\*1</sup>—**Nāliqū**<sup>\*2</sup>—Ūrūqūdāi·Tūmān·Timūr

Ġinkiz ḥān—Ġāğatāi ḥān—Mī-tūkān—Būri—**Qādāqī Sāğān**—Tūqū—**Dū al-Qarnain·'Alī-ūğul**

Ġinkiz ḥān—Ġāğatāi ḥān—Mī-tūkān—Būri—**Ağiqī**—Arik-Kürkān·**Ūrūk**<sup>\*3</sup>·Tās-Timūr·Timūr-Būqā·Is-Timūr·Yuldās-Timūr

Ġinkiz ḥān—Ġāğatāi ḥān—Mī-tūkān—Būri—**Ağiqī**—**Ūrūk**<sup>\*3</sup>—Īl-Būqā·Qazān

Ġinkiz ḥān—Ġāğatāi ḥān—Mī-tūkān—Būri—Abišqah—**Ūrūk**

- ※1 この Qadaqi/Qadaqai-Sečen は, その母が弘吉剌族<sup>コンギラト</sup>の Yisūn 妃であった。かれは Mangū-Qān によって Sečen と命名された。baqši 僧たちの慣習によって剃髪していた。Mangū-Qān と共に漢兒<sup>キタイ</sup>の田地に軍を以て前去し, 道中亡くなった。かれの子女たちは大多数が Dūā の根前にいた。

- ※2 この Nāliqū の母は Kirmān の Sulṭān の娘 Tūrken という小名の<sup>もの</sup>的で, かれは Hizr と呼ばれている。Tūqū はかれと同一の母から生まれた。Nāliqū は **709A. H.** (1309年6月11日~1310年5月30日)に Kūngak 寛闍の後, 君主に坐せしめられた。かれは Dūā の後裔を撲滅せんと企畫をなした。Dūā の息子の Kabak 怯伯は機会を見つけ, 祝延<sup>トイ</sup>の終わりに, Nāliqū が夜眠ってしまうと, 一味と共に事を起こし, かれを殺した。そのご, **710A. H** (1310年5月31日~1311年5月19日)に統治権<sup>ケベク</sup>は怯伯に確定された。

- ※3 この Ūrūk は Nāliqū に背いたが, 賭博<sup>ノコル</sup>の伴當の手にかかり殺害されるに至った。

- 40) mutarris 楯持つ者よ, mihrās 闇夜に恐るもの無き丈夫よ, と解すことも可能だが, その場合, 後に続く va が不要。
- 41) *Ġāmi'al-Tavāriḥ*, MS: Paris, suppl. persan209, f. 172b, f. 174a. MS: Paris, BNF, suppl. persan 1113, f. 130b, f. 131b.

[Üktāi 窩闊台] 第1子 Kiük 貴由: …かれには3人の息子がいた。順序は以下の通り。① Ḥwāgah ügöl: かれの母は□□族の Qaimiš 皇后であった。かれには判明している子息がない。② Nā'ü 腦忽③ Hüqū < Hö'ü 火忽: かれの母は Qumāi/Qūmāi 妃であった。かれには現在 **Tükmah** 秃苦滅という名の孫 —— 海都の息子および察八兒と ta[mā]gāmiši 争っている —— があるそうだ。かれの farmān 令旨は得ておらず, 右手の道にいるようだ。その父もまた **Tükmah** という名だったのである。

[Üktāi 窩闊台皇帝の第5子 Qāši の子海都の第3子] Ürus 幹羅思: 海都の大皇后で Dübgin 朶兒別眞という名のものから生まれた。父の死後, 王國を tamāgāmiši 争っており, 窩闊台皇帝の子 **Tükmah** の子 **Tükmah** はかれとこの問題について一致・同盟している。

*Ġāmi'al-Tavāriḥ*, MS: Istanbul, f. 134b, f. 135b, f. 137b, MS: Taškent, f. 106a, f. 107a, f. 109a.

[Üktāi 窩闊台皇帝の] 第1子 Kiük 貴由: …かれには3人の息子がいた。順序は以下の通り。① Ḥwāgah ügöl: かれの母は□□族の Qaimiš 皇后であった。かれは3人の息子を授かっている。順序は以下のとおり。(1) **Tükmah**: かれには4人の息子がいる。Yüsmüt・Yisükān・Ülgäkān・Ābāci (2) Būsü (3) Hüqū: かれは10人の息子を授かっている。順序は以下の通り。(1) Ürkah (2) Qūmbü (3) Künçak (4) Dürgi (5) Tübšin (6) İrkāmān/İrmaksan (7) Takūs-Büqā (8) Takši (9) Därbünk\* (10) İkir dai

\*系圖になし。かわりに İskib があがる。

[Üktāi 窩闊台皇帝の第5子 Qāši 合昔の子海都の子] Ürus 幹羅思: 海都の大皇后で Dübgin 朶兒別眞という名のものから生まれた。父の死後, 王國を tamāgāmiši 争っており, 窩闊台皇帝の子 **Tükmah** の子 **Tükmah** はかれとこの問題について一致・同盟している。

*Šu'ab-i Paṅgānah*, MS: Istanbul, f. 124b.

Ġinkkiz hān—Ükdai hān—Küyük hān—Ḥwāgah ügöl—**Tükmah**\*

\*この男等の母は, KYČK hān < Kōnček 寬徹汗の娘たる 妃 だったのである。

*Mu'izz al-Ansāb*, MS: Paris, f. 40b-41a.

Ġinkiz hān—Ükdai Qāān—Kiük hān—Ḥwāgah ügöl—**Tükmat**

- 42) *Ġāmi'al-Tavāriḥ*, MS: Paris, f. 174, MS: Istanbul, f. 135b, f. 138a, MS: Taškent, f. 107a, f. 109b.
- [Üktāi 窩闊台皇帝の第5子 Qāši 合昔の子海都の第1子] Čäpār 察八兒: □□族出身の□□より誕生した。現在, 海都の座次にはかれが在る。かれをみた人々の話では, ひじょうに瘦せて貧相, かれの顔と髭は Rüs 阿羅思 (幹羅思)・Čarkas 撒耳可思 (徹兒怯思) の人みたいで, [中肉中背である] とのことである。[かれには7人の息子がいる。順序は以下のとおり。Bürī-Timür・Ülgāi-Timür・Qūluq-Timür・Čäçäktü・Tüq-Timür・Čarıktü・Ülādāi. 平安アレ]
- 43) 'Alā al-Dīn 'Aṭā Malik Juvayni, Qazvini. M (ed), *Ta'riḫ-i-Jahān Gushā*, vol. 1, Leyden & London, Brill, 1937, p. 31, pp. 226-227, MS: Istanbul, Süleymaniye Kütüphanesi, Fātif4316, f. 27b, f. 168a-168b, MS: BNF, suppl. persan2018, f. 18a, f. 109a, MS: suppl. persan 205. f. 10b, f. 61b, MS: suppl. persan1375, f. 11b-12a, f. 81a, MS: suppl. persan1556, f. 11b, f. 78a.,  
・察合台を [Qayālig·] Uigür/Uiqür 畏兀兒の諸城鎮の疆域から Samarqand 撒麻耳干・Buḥāra 不花刺 (不哈刺) まで, かれの居住地は, Almālig 阿里麻里の近くにある

Qunās/Quyās だった。

・Mā-warā' al-nahr · Turkistān 途魯吉の地の諸城鎮が解放されると、(かれ=察合台汗及びかれの) 子供たちと軍勢の駐屯地は、撒馬兒罕から Biš-Baliğ 別失八里の近くまで、四方は諸王の宿營に相應しい卓越した娛樂の諸地であった。その避暑地は、阿里麻里と [Qūnās/Qūbāq] —— 春・夏にはアラムの果園に似かよう —— であった。水鴨たちの群れのための köl と呼ばれる複数の大禁地 (=山陵) をかれの疆域内に設けていた。Qutluğ という名の邑も建設した。

- 44) *Ġami'al-Tavāriḥ*, MS: Paris, f. 174, MS: Istanbul, f. 135b, f. 138a, MS: Taškent, f. 107a, f. 109b.  
[Üktāi 窩闊台皇帝の第5子 Qāsi 合昔の子海都の子] Yāngičār 仰吉察兒: □□族の□□妃より生まれた。容貌と學識があり、父はかれをひじょうに愛した。全軍とともに、Ürdah 幹兒朶 (阿哈) の後裔に屬する Qūniči 火你赤の Bayān 伯顏の方面の Sübiah < šibe'e 藩籬を「互いに敵である」とて、かれに治めさせた。伯顏は皇帝およびイスラームの君主——彼ノ統治ヲ永遠タラシメタマエ——と友好的であり、かたやかれの従兄弟の Kübluk 海都と土哇の子女たちの側に傾いていたので、かれらは伯顏が皇帝およびイスラームの君主の軍勢に／伯顏が皇帝の諸軍に、イスラームの君主とともに] 連合してかれらの勾當の損害の理由にならないようにすべく、かれを教唆していた。伯顏が朶赤の後裔に屬するので、朶赤の寶座を擁する Tūqtai 脫脫はかれの庇護者であり、現在、海都と土哇の息子たちとの戦いに出陣せんと思案中である。この状況を以て、[Āğurūqči 奧魯赤と Üladai 兀刺朶という名の] 使臣たちを此處 (=フレグ・ウルス) に派遣してきた。[平安アレ]。

- 45) *Tāriḥ-i Ūljāitū Sultān*, MS: Istanbul, f. 154a, MS: Paris, f. 28a-28b, *Tāriḥ-i Ūljāitū*, p. 41, *Die Chronik des Qāšāni über den Ilchan Ūljāitū* (1304-1316), pp. 47-48, text, pp. 41-42.

(土哇) かれ (= 察八兒) の後繼仰吉察兒を Qaidu 海都の國の君主に据えた。いっぽう、察八兒はその母 Kükūi hatūn の營盤に住した。仰吉察兒はしばらく君主として新年 (の儀) に奔走していた。土哇は Būkmā < 禿苦滅をも死神の處罰の鉤爪を以て殺したが、自身、齡が盡きた。しかし、察八兒への企畫の最中であつた。察八兒はかれの企畫を知ると、自身の兄弟たる仰吉察兒、臣僚たち、側近たちとともに皇帝の 1200 匹の鋪馬を以て、皇帝の御前に向かった。Ĥān-bāliq < Qan-bāliq 中都 (=南城) に到着すると、仰吉察兒は毒入りの šarbat 舍里八 (=煎諸香果泉, 調蜜和而成) を以て殺された。いっぽうで察八兒を御前の侍奉に命じた。如今まさに、陛下の侍奉である。

『元史』卷二十二「武宗本紀」“[大德] 十年七月 (1306 年 8 月 10 日~9 月 8 日)、自脫忽思箇之地踰按台山, 追叛王斡羅思, 獲其妻孥輜重, 執叛王也孫禿阿等及駙馬伯顏。八月, 至也里的失之地, 受降諸王禿滿・明里鐵木兒・阿魯灰等降。海都之子察八兒逃于都瓦部, 盡俘獲其家屬營帳。駐冬按台山。降王禿曲滅復叛, 與戰敗之, 北邊悉平”, 『國朝文類』卷二十三元明善「太師淇陽忠武王碑」, 卷二十六虞集「句容郡王世續碑」, 『大元馬政記』21b「刷馬」“武宗皇帝至大三年三月十一日 (1310 年 4 月 11 日), 丞相別不花奏「尙書省・樞密院等官議: 西面察八兒等諸王・駙馬多年不曾朝會。今始來降。振起其軍站物力。合拘刷馬正」。奉聖旨, 准”, 『元史』卷二十三「武宗本紀二」“[至大三年三月]庚寅 (十二日=4 月 12 日), 太陰犯氏, 尙書省臣言「昔世祖有旨, 以叛王海都分地五戶絲爲幣帛, 俟彼來降賜之。藏二十餘年。今其子察八兒向慕德化, 歸覲闕廷。請以賜之」。帝曰「世祖謀慮深遠。若是待諸王朝會, 頒賞既畢, 卿等備述其故, 然後與之, 使彼知愧」”, “[六月] 壬申, 以西北諸王察八兒等來朝, 告祀太廟”, 『國朝文類』卷九姚燧「至大三年十月敕」, 『元史』卷一一七「牙忽都傳」。

『オルジェイトゥ史』が語るアジキ大王の系譜

46) 『モンゴル時代の「知」の東西』 p. 703.

### 補 註

[補 1] *Ġāmi' al-Tavāriḫ*, MS: Istanbul, f. 131a-131b, MS: Taškent, f. 102b-103a.

【第三子オゴデイ・カアンの *haṣṣah* = <sup>エムチユ</sup> 梯己: 四千戸】

- ① *Īlūkāi* < *Ilügei* <sup>イルゲイ</sup> 亦魯該 / 亦魯格の千戸: 札刺兒部<sup>ジャライル</sup>の出身であった…
- ② [*AYLKTW*/*AYLKTWA*] < *Elege/Elige-to' a* <sup>エリゲトウア</sup> 也里可禿阿の千戸: 孫都思部<sup>スルドウス</sup>の分枝たる *Tam'aliq* < *Tam'aliq* 種族出身の *Eljigidei* <sup>エルジギデイ</sup> 額只吉歹<sup>アカ</sup>の兄であった…
- ③ *Dāir* > *Dayyir* <sup>ダイイル</sup> 答亦兒の千戸: *Mönglik-ecige* <sup>モングリクエチゲ</sup> 蒙力克父の *uruq* 宗族に属する *Qongqotan* <sup>コンゴタン</sup> 黄忽答部の出身であった。
- ④ ■■■の千戸: 原本に無かった。

の■■■が *Qavgatai*, <sup>ダゲイ</sup> 迭該 (別速惕部) <sup>ベスウト</sup> の別名か子弟だった可能性がある。なお、上記の寫本に先行するテヘラン本系統の MS: Paris, suppl. persan209, f. 168b をみると、①~④全ての記述が無い。MS: St. Petersburg, PNS46, f. 83a では“四千戸”と書いておきながら、③④が無い。“原本”の意味を確定する上で、重要な箇所といえる (上記寫本のチャガタイの四千戸の後ろ二つの千戸の箇所にも [原本に無かった] とあり、テヘラン本系統では確かに当該箇所は存在しない)。

[補 2] *Mu'izz al-Ansāb*, MS: Paris, f. 34b-35a, MS: London, f. 35b, MS: India, f. 36b.